
エリクシルの魔道士

花森キリカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エリクシルの魔道士

【Nコード】

N4681V

【作者名】

花森キリカ

【あらすじ】

魔力を秘める『魔石』を使うことによって、人々が自由に魔法を使える世界。

魔石研究所の助手である少女ノエルは、ある日謎の少年エディに出会う。

ノエルは平穏な生活を送っていたが、ある事件をきっかけに、エディと共に旅に出ることになるのだった。事件の影には謎の組織『ウロボロス』の姿が――。

そして物語は、不老不死をもたらすという伝説の霊薬『エリクシル』

を巡る戦いへと繋がっていく。

序章

辺りを漆黒の闇が包み、深い夜が訪れた。天上に浮かぶ銀盤に、薄い雲がかかり、一層濃い闇が漂う。

寝静まった街の静寂を破る、慌ただしい無数の足音が響いた。

「そっちに行ったぞ！ 追え！」

鋭い声が飛ぶ。何かを追って走っているのは、市街地にはおよそ不釣り合いな物々しい騎士たちであった。数は十人程度だろうか。騎士たちが走っている大通りから逸れた狭い路地に、素早い身のこなしで走る人影がある。

背後を気にしつつ、しかし速度は決して緩めずに走り続けるその人影は、十六、七歳ほどに見える少年だった。

「しつこいな、あいつら……」

乱れた息を整えながら小さく呟く。どうやら、この少年が騎士たちに追われているらしい。

少年を捕らえようとする無数の足音が迫ってくる。

少年はしばらくそのまま走り続けたが、何を思ったのか、突然立ち止まった。

「いたぞ！」

間もなく騎士たちが追い付いてきた。しかし、すぐに捕縛するようなことはなく、剣を構えて、じりじりと間合いを詰めてきている。まるで、少年を警戒しているかのようだ。

その時、月を覆っていた雲が晴れ、対峙する少年と騎士たちを照らし出した。

少年に最も近い位置にいた数人の騎士は、思わず目を見張った。月光に照らし出された少年の髪は、息を呑むほどに見事な赤だっ

た。よくある茶がかかったような赤毛ではない。極上の紅玉^{ルビー}を溶かしたかのような、深く滑らかで鮮やかな紅だった。

しかし、驚くべきはそれだけではなかった。

瞳は世にも珍しい黄金だったのである。まるで太陽を二つはめ込んだかのようなその瞳に、その場にいた騎士たちは目を奪われずにはいらなかった。

月の光があるとはいえ、昼のように見えるわけがない。瞳の色など普通なら判別できないが、少年のそれはあたかも太陽の下にいるかのように、鮮明に騎士たちの眼に映った。少年のいる場所だけ陽光に照らされているのではないかと錯覚するほどだった。

隊長格と思しき一人の騎士が前に進み出る。

二十歳をいくつも出ていないような若い男だ。しかし、未熟などという言葉は一切感じさせず、威厳さえ漂わせている。

月光に煌めく白銀の髪と、鷹を思わせる鋭い紺碧の瞳という冷たい美貌が、更に彼のまとう怜悯な空気を引き立てていた。

「エドワード・クライスだな」

凜としたその声に、少年に目を奪われていた騎士たちは我に返った。

「これだけ追い回しておいて、人違いだったらどうするんだよ？」
いくつもの剣の切っ先が自分に向けられているというのに、少年は恐れている様子など全く感じさせず、肩をすくめた。

大の男でも立ち竦んでしまうような状況なのに、少年の口調は極めて軽快だ。

「我々と共に来てもらおうか」

対して、若い騎士の声は重々しい。

少年はため息をついた。

「大体、何でおれが捕まらなきゃならない？」

「とぼけるな」

騎士の声が凄みを帯びた。青い瞳が鋭く光る。

「秘密結社『ウロボロス』への関与——これだけの罪を犯しておい

て、白を切るといのか」

しかし、少年に気圧された様子はない。

「――悪いけど、捕まるわけにはいかないんでね」

少年が右手を頭上に上げる。

「取り押さえろ！」

騎士が叫んだが、遅かった。

少年の右の掌に光球が出現する。少年が騎士たちに向かってそれを投げると、光球は目も眩むような強烈な光を放ち、一気にはじけた。

狭い路地に白光が満ちる。熟練の騎士たちも、あまりに強い光に目を潰されて身動きができなかった。

「じゃあな！」

少年の声が響くと同時に、光が消えた。騎士たちが目を開けると、少年の姿もまた、跡形もなく消え失せていた。

「逃げられたか……」

若い騎士が憎々しげに呟いた。

「すぐに行方を追え。ウロボロスに繋がる貴重な手掛かりだ」

第一章 赤髪の少年（1）

『昔々あるところに、魔法の国がありました。』

国の名前はクロートスといい、クロートスの王様とその一族は皆魔法が使えたといえます。

ある時、年老いた王様が言いました。

「永遠の命が欲しい」

王様は家来たちに命令して、永遠の命を得る方法を探させました。そしていくつかの歳月が過ぎた頃、王様の最も信頼する大臣が、命に永遠を、老いた体に瑞々しい若さを、死者に生を与えるという魔法の薬を見付けました。その薬は、まるで血のように真っ赤な色をしていたといえます。

大臣は思いました。

「早く王様に渡さなければ」

しかし、大臣は考えます。

「これを飲めば、私は永遠の命を得ることができる」

そして大臣は王様に赤く染めた水を渡し、「これが永遠の命を得る薬です」と嘘をつきました。

王様は喜んで水を飲み、大臣は赤い薬を飲みました。

しかし、王様が飲んだのは赤く染まったただの水。王様は騙されたことに気付きます。

王様は大臣の首をはねて処刑しました。

「ひょっとすると、薬を飲んだ大臣の血を飲めば永遠の命が手に入るかもしれない」

そう思った王様は、大臣の体から流れ出た血を飲みました。

すると、みるみるうちに王様は若返り、王様は永遠の命を得ました。

永遠の命を手にした王様の噂は国中に広がります。

そんな王様を畏れ敬う人もいましたが、万能の霊薬となった王様の血を狙う人もまたいたのです。

赤い薬を巡って戦乱が起きました。

王様は殺され、別の人が永遠の命を得ます。しかしその人もまたすぐに殺され、新たな人が永遠の命を得る――そんな戦いが繰り返されました。

ある老人は薬を飲んで若々しい体を手に入れました。

ある母親は病弱の子供に薬を飲ませ、病気を治しました。

ある青年は死んでしまった恋人に薬を飲ませ、恋人を生き返らせました。

かつて豊かだったクロートスは見る影もなく荒れ果て、人々は死に絶えていきました。

その時です。暗黒に包まれたクロートスに、一条の光が射し込みました。

絶望と憎悪に支配されたクロートスに、かつての王様の血を引くという魔法使いが現れたのです。

魔法使いは争う人々を鎮め、二度と醜い争いが起こらないように薬を封印しました。

魔法使いが封印したその薬は、今でもどこかに存在しているのだといいます……』

ノエルは古いその本を閉じた。そっと息をつき、絹糸のように柔らかな金髪をかきあげる。

ここはダルトン魔石研究所の書斎である。

この本の題名は『クロートスの赤い薬』。

小さい頃から何度も読んできたお伽話だ。隅々まで頭の中に入ってしまった。子供向けの話にしてはおどろおどろしい内容だが、昔はそんなことは気にならなかった。

しかし、魔法の研究に携わる身となった今、ストーリーよりも舞台となるクロートスに興味がある。

クロートスは実在した国だ。

ここハイドニア王国の西方にあったと言われている。西のトルーク地方には、クロートスに関する遺跡が数多く残されている。

千年ほど前に栄え、やがて滅んだ国。人間が身一つで魔法を扱うことができるなど、決して有り得ないとされていたが、クロートスの王族は本当に何の道具もなしに魔法を使えたらしい。

『魔力』を使い超常現象を引き起こす技術——魔法。

魔法技術がそれなりに発達した現代でも、普通の人間は『魔石』と呼ばれる魔力の結晶がなければ魔法を使うことができない。

クロートスの王族がどのようにして魔法を使っていたか——これは魔道を歩む者たちの永遠の謎なのである。

魔石を使わなければ人間は魔法を使えない。逆に言えば、魔石を使えば誰でも魔法が使えるということだ。

魔石には様々な種類がある。炎を起こす魔力を持つ魔石、水を生み出す魔力を持つ魔石、身体能力を向上させることのできる魔石——。その種類は数え切れないほどだ。

しかし、魔石は希少価値が高くそう易々と手に入る物ではない。

魔石が採れるのは、人が踏み入ることのない天険の地であることが多い。しかも実用できるレベルの良質のものは非常に少ない。

人工の魔石も研究はされているが、まだ実用段階には至っていないのだ。

ただ、魔石を利用した武器なら実用化されている。ハイドニアの国軍『ハイドニア騎士団』の上級騎士が所持する剣は、魔石の力を使った通称『魔法剣』と呼ばれるものだ。

剣に限らず、魔石が使われた道具は通常のものより遥かに高い力を持つ。

騎士が持つものだけではなく、魔石の美しさを生かし、指輪や腕輪などといった装飾品に魔石をあしらひ、魔法を使いやすくした『

魔法具』と呼ばれる道具も使われている。これはそれなりに富のある人々の間に、護身用あるいは普通の装飾品として広く普及している。

魔法技術の向上――すなわち人工魔石の実用化は、軍事力の発達も指す。

軍事力だけではない。魔石の精製が可能になれば、現在は総じて高価で一般庶民が持つことのない魔石がもっと身近な存在となる。そうすれば、文化も大きく進歩することだろう。

思索を巡らしているノエルの背中に、優しげな声がかかった。

「ノエル、またその本を読んでいるのかい？」

ノエルははっと我に返った。

「ダルトン博士！」

いつの間にかすぐ隣に、ノエルが助手を務める魔石研究者ダルトン博士がいた。

「ごめんなさい。また散らかして……」

休憩時間、ノエルは大抵研究所の書齋にこもって本を読みふけている。多くは魔法書だが、たまに小説なども混じっている。

ノエルは慌てて床に積み上げてある本を棚に戻そうとした。しかし、博士はそれを優しく制止した。

「いや、いいのだよ。うむ、本を読むのは良いことだ」

ダルトン博士は優しい面差しが印象的な、初老の男性だ。同じ白衣姿でも、研究者というよりは医者のように見える。

人の心をたちまち穏やかにさせてしまうような柔和な雰囲気を持つ博士だが、こう見えても魔石研究の第一人者だ。

そんな彼がこんな田舎の小さな研究所で、ひっそりと研究を続けているというのはおかしな話だが、そこが博士の変わったところだ。彼は若い頃からその才能を発揮し、王立の研究所から何度もお呼びがかかっているが、一向に断り続けている。王立研究所勤務ともなれば、将来を約束されたようなものだ。そんな話を断るなど信じられないと、周囲からは散々非難を浴びたらしい。

ノエルはその理由を聞いたことはないが、博士の人柄からして何となくわかるような気がした。彼はのんびりとした場所にいるのが似合う。

まだ十五歳の少女を助手にする研究者も、彼くらいのものだろう。

「さて、研究を続けるとしよつかね」

「はい！」

研究所があるマクリーンの町は、ハイドニア王国の南、アトレイス地方にある小さな町だ。

ノエルがダルトン博士の助手になったのは二年前だ。

十三年前、わずか四歳で両親を失ったノエルは、マクリーンに住む叔父夫婦に引き取られた。

叔父は大変な読書好きで、広いとは言えない家の中には至る所に本があった。多くは小説だったが、魔法関係の本もかなりの量だった。

ノエルは家にあった魔法関係の書物を読みながら育ち、それがきっかけで魔法に携わる仕事がしたいと思ったのだ。

わずか十五歳でダルトン博士の助手になると言った時、叔父夫婦は当然ながら反対した。

魔石の権威でもある博士が、独学で勉強しただけのろくに役に立ちそうもない助手など雇うはずがない、そもそも若い娘が一人暮らしの男性と二人きりというのがけしからぬと言うのだ。

当然の言い分だった。しかしノエルは諦めなかった。

叔父夫婦の制止を振り切って、町の外れにある研究所へ走った。

博士とは顔見知りではあったが、まともに話したことはほとんどなかった。しかし、話してみると、博士は見た目通りかそれ以上にゆったりとした雰囲気、温厚で紳士的な人物だったので、少し戸惑ってしまった。研究者というものは、独特の世界観を持ち、一般に『変人』と呼ばれることが多いからである。

ノエルの無理な願いに、博士は快く応じてくれた。ノエルは晴れて魔法の研究に携わることとなったのである。

以来、ノエルは博士の研究所兼自宅に住み込み、助手の仕事の他に家事全般を請け負っている。

「む、そろそろお昼かね」

窓の外を見て博士が言った。晴れ渡った青空には、太陽が高く昇っている。

「あ、本当だ。町に行ってお昼ご飯を買ってきますね」

ノエルが言うと、博士はにっこりと笑った。

「よろしく頼むよ」

博士は狂ったように研究に没頭することはなく、一日三回の食事はきちんと摂る。食事は全てノエルが作っているが、博士はおいしいと言って残さず食べてくれるので、作り応えがある。

ノエルは財布を持って研究所を出た。

「気持ちいい天気……」

季節は春だ。眩しい深緑の葉を暖かい風が揺らしている。空は目に染みるほど透き通る青だ。

五分ほど歩くと市場がある。

マクリーンは小さな町だが、大通り沿いの市場はかなり活気がある。立ち並ぶ店には、色とりどりの野菜や果物、活きのいい魚などの商品が並べられ、非常に目に楽しい。

ノエルは行きつけの魚屋に入り、鮮やかな色の魚たちを選び始めた。

「おう、ノエル！」

店の主人が声をかけてきた。ノエルはダルトン博士の助手になる前からこの店に通っているので、主人とは顔見知りである。

「こんにちは、おじさん。お勧めはある？」

「これなんかどうだい？」

主人は店先に置いてある真っ赤な魚を指した。

「この辺りじゃ滅多にとれない珍しい魚だよ。味は保証するぜ」

「へえ、綺麗な色ね」

「おうよ。目新しいだろ？」

値段は安くはないが、博士も喜んでくれるかもしれない。

「じゃあ、これを一匹ちょうだい」

「まいどあり！」

主人は中でも一番大振りのものを包んでくれた。

代金を渡そうとした時、主人がふと言った。

「そうそう、最近物騒なことが多いから気を付けな」

「物騒なこと？」

「昨夜すぐそのボーディンの町で、指名手配犯と騎士団がやり合ったらしい」

初耳だった。それだけのことが起こったのなら知っていても良いはずだが、ノエルは研究所から出ることはあまりないため、世間事情に疎い。

ノエルは首を傾げた。

「ハイドニア騎士団が、指名手配犯と？」

国王直属の軍であるハイドニア騎士団が犯罪者の捕縛を担当するのは異例のことだ。犯罪者の捜査、逮捕は憲兵の仕事である。騎士団が直々に出動するとは、標的は国家に仇なすような凶悪犯のはずだ。

店の主人は少し声をひそめた。

「何でも、犯人はあのウロボロスの関係者らしい」

「！」

ウロボロス——近年活動が活発化しているという、魔石の密輸組織だ。

どのような方法を使っているのか、易々と捜査の網を潜り抜けているという。

やっと尻尾を掴んだと思っても、使い走りのような末端の末端に過ぎず、未だ組織の全容は掴めていない。

そのウロボロスの関係者ともあれば、ハイドニア騎士団が出動す

るのも納得がいく。

「捜査の指揮を執ってるのは、『桂冠の騎士』ランスロット・アーヴィン卿なんだと」

その名には聞き覚えがあった。

ハイドニア騎士団で最も誉れ高い七人の騎士——桂冠の騎士の一人であるランスロットは、最年少で『桂冠の騎士』に任命されたという青年だ。確か、任命当時は弱冠十九歳で未だに二十一、二歳だったはずだ。

そういった事情に疎いノエルでも知っているのだから、ランスロットは相当有名な騎士である。

「そのアーヴィン卿の手を以てしても、まだ捕まえられていないの？」

ノエルが訊くと、主人は大きく頷いた。

「らしいねえ。確か犯人の名は——エドワード・クライスだったかな。騎士団を振り切るほどの力だ。気を付けねえと、本当に危ないよ」

ノエルは頷いた。

「ありがとう。おじさんも気を付けてね」

第一章 赤髪の少年（2）

ノエルにとって、ウロボロスは絶対に許せない存在であった。

世の人のためにある魔石を、私利私欲のために悪用している――それがどうしても許せない。そして、そんなウロボロスの力を利用して魔石を手に入れている人がいるのも悲しいことだった。

厳しい顔をして歩いていたノエルは、研究所の前に人影があることに気付いた。

「……？」

研究所に来客は滅多にない。

研究所の前にいる人物は、中に入ろうとするでもなく、ただじつと建物を見上げている。

ノエルはそろりと近寄って声を掛けてみた。

「あの……何か御用？」

すると、建物を見上げていた人物が振り返った。

この辺りでは見ない顔の少年だった。年はノエルと同じくらいだろうか。

酷く人目を惹く風貌をしていた。

髪の色は燃えさかる炎のようにも、鮮血のようにも見える、鮮やかな緋色である。こんな色をした髪は見たことがなかった。

瞳の色はもっと珍しかった。

太陽の如く煌めく黄金である。

顔立ちは整っている。いや、整いすぎているといってもいい。誰もが文句なしに美少年と称するだろう。

だが、顔の造りの美しさだけではない。町を歩けば、すれ違う人々が老若男女問わず振り返り見てしまうような、強烈に人を惹きつ

ける何かがあった。

「あんた、この人？」

少年が研究所を指差して言った。

ノエルははっとなって頷いた。

「え、ええ」

「ここ、何してるところ？」

「研究所よ。魔石の研究をしているの」

ノエルが答えると、少年は金色の瞳を意外そうに見張った。

「それにしちや随分小さいけど」

「個人の研究施設なの」

「へえ……個人で魔石の研究か。すごいな」

少年が感心してそう言うので、ノエルは思わず笑顔になった。

「よかったら、中に入って」

「いいの？」

「もちろんよ」

しかし、少年は躊躇ったようだ。

「本当に大丈夫なのか？ 機密とかあるんじゃないの？」

最もな疑問であるが、ノエルは笑って首を振った。

「うちの博士は、『知識は共有する』を信条にしているの。魔法に

興味を持つ人が増えたら、それだけ魔法は発達する、ってね」

「いい意味で変わった博士だな」

少年は笑った。まさに太陽のように明るい笑顔だった。

「それじゃ、遠慮なく見学させてもらうよ」

ノエルは扉を開けて、少年を招き入れた。

「そういえば、名前は？ 私はノエルよ。ノエル・ブライト」

「おれはエディ。よろしくな、ノエル」

突然の来客も、ダルトン博士は快く歓迎した。

狭い研究所には来客用の部屋はない。なので、主に休憩用に使っている部屋にエディを通した。

ノエルは昼食の用意があるので席を外したが、ダルトン博士はエディに研究内容などを詳しく説明し、彼の質問にも丁寧に答えているようだ。

三人分の昼食を作り終え、休憩室に再び入った頃には、二人は随分と打ち解けていた。

「ご馳走にまでなって、何だか悪いな」

遠慮がちなエディに、博士は笑いかけた。

「何、構わんよ。ここに私とノエル以外の人間がいることなど滅多にない。特に私など、町に出ることもほとんどないのでね。外界の人間と話すことができて嬉しいよ」

そういう博士は本当に嬉しそうだった。

ノエルはエディの素性に興味が湧いた。

旅人風の出で立ちだが、荷物はほとんど持っていない。この年頃の少年が家を離れてふらふらしているということは通常ではない。家出少年かとも思ったが、きっとそうではない――ノエルの直感が告げていた。

「エディはどこから来たの？」

ノエルの作った料理をうまいうまいと食べているエディは、手を止めずに答えた。

「どこからでもないな。国中をふらふらしてるから」

「旅をしているの？」

「まあ、そんなもん」

「生まれは？」

「西」

恐ろしく短い答えである。ノエルは、どこの地方の何という町で生まれたのか訊いたつもりだったのだが、それ以上は尋ねなかった。もしかしたら、訊かれたくない事情があるのかもしれないからだ。

すると、ダルトン博士は楽しげに笑った。

「謎の美少年の素性に興味が湧いたかね」

ノエルは思わず顔を赤くした。

「い、いえ！　そういうわけでは……」

当のエディは料理をおいしそうに食べている。

すると、博士の瞳がふと研究者のものに変わった。

「クロートス王家の瞳だな」

「え？」

博士の眩きの意味がわからず、ノエルが思わず聞き返すと、エディは料理を食べる手を止めて顔を上げた。

「大昔に栄え、無残な滅亡を遂げたクロートス王国を知っているかね」

「……ああ」

その時、エディの瞳がふっと遠くなったような気がした。

「その身一つで魔法を操ることのできたというクロートスの王族……彼らの瞳の色は皆、美しい金色であったとか」

「……………」

「彼らの金の瞳こそ、魔力の源——つまり、魔石のような働きをしていたという説もある」

エディは困ったように笑った。

「おれがクロートスの王族だった？」

「そうは言っておらんよ。金色の瞳をした人間は非常に珍しいが、探せばいないこともないだろう。ただ、クロートス王国があったとされる場所はこのハイドニア王国の西方。君の生まれも西。何か関係がありそうだと考えてしまうのだよ」

エディは楽しげに笑った。

「おもしろいな」

ダルトン博士も笑う。

「そうだろう。ここで私の助手にならんかね？　君なら大歓迎だ」

「それも楽しそうだけど……やらなきゃいけないことがあるんだ」

エディの瞳が真剣味を帯びた。自然と、ノエルとダルトン博士も

沈黙する。

「何か、目的があるのだね」

博士の問いに、エディは頷く。

「人を探してる」

「どんな御仁かね？」

ダルトン博士が尋ねると、エディは腕組みした。

「――名前はマーリン。マーリン・アンブロジウス。知ってる？」

ノエルには聞き覚えのない名前だった。博士の様子を伺うと、やはり博士も知らない様子だ。

「覚えのない名だが……高名なお方なのだろうか？」

エディは首を振る。

「いや、全然そんなんじゃないんだ。聞いてみただけだよ」

マーリン・アンブロジウス……ノエルは頭の中で復唱したが、やはり聞いたことのない名前だ。

「おれのことはいいいからさ。良かったら研究所を案内してくれないか？」

話題を変えるようにエディが言った。

博士が笑顔で応じる。

「もちろんだとも。ノエル、彼を案内してやってくれ」

「はい！」

ノエルとエディは部屋を出て行ったが、博士は座ったまま動かずにいた。

やや斜め下を見つめる博士の両目は、彼に似つかわしくない暗い影が宿っている。

「マーリン、アンブロジウス……」

低く呟いた博士の声には、わずかに苦味が混ざっていた。

「今日は楽しかったよ。ありがとうな」

エディが研究所を出る頃には既に陽は落ち、辺りは薄い闇に染まっていた。

「こちらこそ、楽しかったわ」

ノエルは見送りのため、エディと共に研究所の玄関にいた。

「……ねえ、いつこの町を出るの？」

何か話をしたいと思って何とか話題を探したが、一番聞きたくないことを尋ねてしまった。

「明日」

「明日？」

思わず大きな声が出てしまった。まさか、そんなに早くいなくなるとは思わなかった。

「……もう少し、ここにすることはできないの？」

何を我がままを言っているのだかと思いつつも、言わずにはいられなかった。

しかし、エディは少し悲しげに首を振る。

「それはできない。——ここにおれがいたら、皆に迷惑をかけることになる」

「どうして？ 全然迷惑なんかじゃないよ。むしろ……」

ノエルはそこで言葉を切った。

ここにいてほしい——今日出会ったばかりなのに、そんなことを言うのは図々しい気がしたのだ。

そんなノエルの気持ちを知ってか知らずか——エディはこう言った。

「明日、出る前にもう一度ここに来るよ」

「本当？」

ノエルの顔が輝いた。

エディは頷く。

「じゃ、今日は適当に宿をとって休むから。また明日な」

「うん、また明日」

エディがその場を去った後も、ノエルはそこで少年の背中を見送

つ
て
い
た。
。

第一章 赤髪の少年（3）

博士と二人で夕食を摂った後、片付けをしようとする時ノエルは博士に呼び止められた。

「片付けが終わったら、私の部屋へ来てくれないかね」
「はい」

何があるのだろうと疑問に思いながらも、ノエルは食器を片付けて博士の部屋へ向かった。

博士の部屋にはほとんど入ったことがない。掃除もこの場所だけは博士が自分でやっているし、常に鍵がかかっていてノエルには入る機会がなかったのだ。

「博士、ノエルです」

扉をノックすると、鍵が開く音がして博士が顔を出した。

「どうぞ、入りました」

博士の部屋はかなり狭く、そんな部屋の中に大量の書物がぎゅうぎゅうに押し込められている。部屋の左右は天井まで届こうかという高さの本棚があり、床にも本やら紙やらが散乱していて、足場がほとんどない。博士はここで寝起きしているはずだが、ベッドらしきものは見当たらない。部屋の端に毛布と枕が置かれているだけだ。部屋の奥には机が一つあり、その上に小さなランプが炎を灯している。その机もやはり様々なものが置かれている。

いかにも『研究者らしい』部屋だった。

「あの、何でしょうか」

わざわざ自室に呼び出されるなんて、今までに一度もなかった。何を言われるのかと思い、若干はらはらして用件を尋ねたのだ。

すると博士は、部屋の奥の机の上から何かを取って、ノエルに見

せた。

「……？」

それは球形の石に紐を付けただけの簡単なペンダントだった。石はノエルの瞳のように透き通った薄い青色をしている。大きさは小指の先ほどだろうか。

「これは……？」

「私の長年の研究の成果だ」

ノエルはぎょつとして博士を見上げた。

こんなものは今まで見たことがない。少なくとも、ノエルが手伝っていた研究には関わっていない。

「ということは……魔石、ですよ？」

博士は頷く。

しかし、ノエルは違和感を覚えた。今まで見たことのある魔石とはあまりにも感じが違ったからだ。

魔力を秘める魔石は、このように透き通るような薄い色ではない。赤や青など、どんな色にしてももっと濃い色をしていて、内側から魔力が染み出すかのように、神秘的な光を湛えているのだ。

しかも、この石は酷く空虚な感じがした。魔力の入っていない、ただの器のような――。

「これはただの魔石ではない」

ノエルの疑問を見透かしたかのように博士が言った。

「これがどういう物なのかは、これから知ることになるだろう」

「博士……？」

いつもの博士と雰囲気違った。穏やかなはずの瞳は暗い陰を帯び、柔和な笑みを浮かべているはずの唇は真一文字に引き締まっている。

「君に持っていてほしい」

そう言って博士は石をノエルに渡した。ノエルは困惑した。

「なぜです？ 研究の成果なんでしょう？ そんな大切なものを……」

「大切だからこそ、だ」

博士はちよつと笑った。

「今、この石について話すことはできない。しかし、いつか必ず知る時が来る。その時まで、これは君に預けておきたいのだ」

「……………」

どんな言葉を探しても、「なぜ」「どうして」という疑問の言葉しか浮かんでこない。ノエルが何も言えずにいると、博士はふと遠くを見つめた。

「あの少年が私たちの前に現れたのは、神の思し召しかもしれない」「エディのことですか？」

博士は頷く。

「彼の存在は福をもたらすか、はたまた禍をもたらすか……」

「何を仰っているんです？」

博士の言っていることが理解できなかった。

しかし、博士は微笑を浮かべるだけでノエルの質問には答えない。

「君を助手にして良かったよ」

ノエルは言い様のない不安感に襲われた。

「博士、そんなことを言わないでください。まるで、これでお別れみたい……」

次第に声が震えていく。

「おお、泣かないでくれ。別れなどんでもない。これから君と魔法の研究を続けていきたいと私は思っている」

「私だって、そうです」

ノエルは目尻に浮かんだ涙を拭った。

「ただ……その石だけは、君に持っていてほしいのだ」

「……わかりました」

ノエルは水色の石を握りしめた。

真夜中、ノエルは突然目を覚ました。

ゆっくりと上体を起こし、ベッドに腰掛ける。

寝起きのはずなのに、不思議と頭が冴えていた。あまり深く眠れていなかったのかもしれない。

(なんだろう、この感じ……)

嫌な胸騒ぎがする。

ノエルは立ち上がり、ベッドの下に閉まってある木箱を取り出した。

この中には、昔からずっと集めて来た魔石がある。どれも小さなものばかりだが、それでも金額に換算すれば相当なものだろう。

ノエルは並べられた石の中から、手探りで一つ手に取った。

炎の魔力を持つ魔石だ。

今は暗闇の中で見えないが、燃えさかる炎をそのまま固めたかのような色をしていて、触るとほのかに温かい。

炎の魔石を取り出すと、それを小皿に置いた。

魔石に指を触れて力を込めると、魔石が赤い光を放ち、次第にそれは赤々と燃える炎に変わった。

魔石の力を借りれば、炎を起こすことなど容易い。

ノエルはそっとドアを開け、濃い闇が落ちる廊下に出た。

普段の歩幅の半分くらいずつ足を進めていく。先の見えない廊下を進むたび、鼓動が早まる気がした。

「！」

廊下に光が洩れている。

あれは――博士の部屋だ。

心臓が大きく跳ねた。

かすかな灯りの洩れる扉の前に立ち、ドアノブに震える手をかけた。

ゆっくりと扉を押し開ける。

そこには、信じられない光景が広がっていた。

部屋の中央に、ノエルに背を向けたかたちで一人の人影が立って

いた。博士ではない。

漆黒のローブに身を包んだ、背の高い男のようだった。

「誰——！」

ノエルが声を絞り出すと、男は弾かれたように振り向いた。

フードを目深に被り、顔も黒い布で覆っている。表情は全くわからないが、鋭く光る深い緑の双眸がノエルを捉えた。

男の手には、長剣がある。その白銀の刃には、べっとりと赤い液体が付いていた。

男が立っている場所の向かい側には——。

「博士！」

ノエルは思わず、魔石が置かれた小皿を落としてしまった。

博士がいた。

博士はうつぶせになって床に倒れている。白衣の背中が、血に染まっていた。

どうしても信じたくない事実を、ノエルは理解した。

男の持つ剣に、博士は貫かれたのだ——。

「どうして……！」

ノエルは蒼白になってその場に座り込んだ。全身の力が抜け、動くことなどできなかった。

研究資料を狙った強盗？　ならば、なぜドアの鍵が開いている？　部屋に唯一ある窓も閉まっているのに、男はどこから侵入したのだろう。

それとも、博士がこの男を招き入れたのか——。

男がゆっくりとノエルに剣を向ける。

逃げなければ。

しかし、足が動かない。どんなに力を入れようとしても、指一本動かない。自分の体が床に張り付いてしまったかのようなのだ。

ただただ、両目から涙が溢れ出る。

男が剣を振り上げる。

ノエルは咄嗟に目を閉じた。

第一章 赤髪の少年（4）

鋼の碎ける音がした。

「何……！」

男のものと思われる、驚愕の声が聞こえる。

自分は男の剣に斬られたはずだった。しかし、痛みも何も感じない。

恐る恐る目を開けると、薄闇の中でもはっきりとわかる赤い髪が目に入った。

ノエルは驚愕と歓喜が入り混じった声で、その名を呼んだ。

「エディ……！」

どうやって男とノエルの間に入ったのかはわからない。どうやって鋼の剣を碎いたのかもわからない。

しかし、確かに彼はそこにいて、床には確かに数瞬前までは剣だった破片が散らばっている。

突如現れた赤髪の少年が、男の凶刃からノエルを守ったのだ。

「エディじゃねえか。こんなところにいたとはな」

男が言った。若い声だ。

「レオン——お前か」

エディが言った。ノエルは思わずエディを見る。二人は顔見知りなのだろうか。

「何が目的だ？」

エディが低く言う。昼間の彼からは想像もできないような、低く押し殺した声だった。エディは重ねて尋ねた。

「なぜ博士を殺した？」

殺した——。

その言葉が現実味を帯びてノエルの心に突き刺さる。
レオンと呼ばれた男が言う。

「裏切り者に言う必要はねえよ」

「裏切り者だって？」

冷やかなエディの声だった。

金色の瞳が壮絶な光を放っている。見た者全てを射殺してしまうかのような、鋭く冷たい光だ。

「よく言うぜ。お前らにとっておれはただの実験材料でしかなかったに。ただの材料が逃げ出しただけで裏切り呼ばわりか？」

男は低く笑っただけでエディの問いには答えなかった。

「思わぬ収穫だ。――組織はお前を探してる。俺と一緒に来てもらおうか」

「まっぴらごめんだ」

その瞬間、エディの右手が男に向かって突き出された。

一瞬のうちに強烈な光が閃く。

それとほぼ同時に、男は驚異的な身体能力で後ろに飛びのき、部屋奥にある机の上に着地した。

男が今の今までいた場所の床が、黒く焼け焦げている。

（何が起ったの――？）

ノエルは頭では理解できずにいたが、エディがやったということだけは直感的に理解していた。

「おっかねえ」

エディの攻撃を軽くかわした男は、楽しんでいるといってもいい様子で言った。

「このことは報告しておく。――また近いうちに会おうぜ」

男は机の正面にある窓を突き破り、外に逃げて行った。

エディは男を追わず、じっと男が立ち去った窓を睨んでいる。

あの男は何者なのか、なぜエディがここにいるのか。

疑問は山ほどあったが、それよりも今は――。

「博士！」

ノエルやつとのこととで立ち上がり、博士のもとへ駆け寄った。

「博士、起きてください!」

博士の瞼は固く閉じられ、顔色は血の気を失っている。

ノエルは必死に博士の肩を揺すった。

「まだ研究を続けなければならぬって言ったじゃないですか! 私に嘘をつくんですか!」

しかし、博士は答えない。

ノエルは両手で顔を覆った。

「嘘……嘘よ……」

博士が死んだなど、信じたくない。つい数時間前までいつものように話をしていたのに。

「ごめん」

エディが言った。

「後少し、早く来ていれば……」

ノエルは答えられなかった。ただ強く首を振るだけで答えた。

エディが来てくれなければ、ノエルも殺されていた。

「あの男は……誰?」

ノエルはやつとのこととで声を絞り出した。

しかし、答えは返ってこない。

「あなたはなぜここにいるの」

重ねて尋ねた。

間を置いて、エディが口を開く。

「妙な魔力を感じたんだ。嫌な予感がして来てみたら――」

エディはそれ以上言わなかった。

「なぜ、こんなことに……!」

博士が殺されなければいけない理由など、何もないはずなのに。するとエディはノエルの正面にしゃがみ込み、彼女の両肩を掴んだ。

「!」

驚いて顔を上げると、恐ろしく真剣なエディの顔がそこにあった。

「ウロボロスを知ってるか？」

あまりに唐突な質問だったが、ノエルは頷いた。

「レオンは——さっきの男はウロボロスの一員だ」

ノエルは声を失った。

なぜ、博士がウロボロスの連中に——？

しかし、なぜエディがウロボロスのメンバーの顔を知っているのだろう。

「どういう、こと……？」

その時ノエルの脳裏に、魚屋の主人に聞いた名前が蘇った。

エドワード・クライス——逃走している、ウロボロスの関係者。

「まさか——あなたは！」

ノエルの言葉を悟ったのか、エディは頷いた。

「おれの本名はエドワード・クライス。以前ウロボロスに所属していた。今は組織を抜けて、ハイドニア騎士団に追われてる」

ノエルが何か言う前に、エディは続ける。

「おれがここに来たのは、本当に偶然だ。組織が博士と関わっていたことも全く知らなかった」

「……………」

「博士とウロボロスは何らかの形で関わり——結果、博士は殺されてしまった。ノエル——」

エディがふと目の前の少女の名を呼んだ。

「もし、博士の死の真相を知りたいなら——おれと来い」

「え……？」

言葉の意味がわからず、思わず聞き返した。エディの金色の瞳は真っ直ぐにノエルの水色の瞳を捉えている。

「おれが探しているマーリンという人物は、かつてウロボロスの幹部だった」

「！」

「マーリンなら何か知っているかもしれない」

あまりの衝撃が続き、ノエルは混乱の境地に立たされていた。エ

ディの声が、遠くで響いているかのように聞こえる。

何が起こったのか、頭が追いついて行かない。

「混乱してるのはわかる。でも、あまり時間がない」

エディは更に続けた。

「おれを追って騎士団がここに来る。もしかしたら、もうここに向かっているかもしれない」

「……………」

「ここに残りたいのなら止めない。でも、博士を殺した犯人には、ノエルが疑われると思う」

「！ どうして…………！」

なぜ私が――。

尊敬する博士を殺せるはずがない。動機も何もあるはずがないのに。

「奴らは痕跡を残さない。ノエルが別の犯人の存在を主張したとしても、目撃者がいなければただの言い逃れで終わりだ。動機なんて後からどうにでもできる。ここを出れば、疑われはしても、とりあえずノエルが捕まることはない。おれが守る」

「……………」

「選べ」

エディの声は力強かった。

「殺人犯の汚名を着せられ、一生を牢の中で過ごすか。おれと来て、博士の死の謎を探るか」

ノエルは唇を噛み、涙を拭った。

泣いていても仕方がない。いくら泣いても、博士が生き返ることはないのだから。

――答えなど、考えるまでもなく最初から決まっている。

「行くわ。あなたと一緒に」

「本気だな？」

「ええ」

「もうここには戻れないぞ。危険な目にも合うかもしれない。それ

でもいいんだな？」

ノエルは強く頷いた。

博士がなぜ殺されなければならなかったのか。それに、これから起こることを暗示したかのような、博士の言葉。ノエルに託された謎の魔石。知らなければならぬことは山ほどあるのだ。

「博士が殺された理由を知らないまま、牢屋の中で大人しくなんてできるわけない。彼の死の真相を知るためなら、何でもする」

尊敬する人の死に嘆いていた少女の姿はどこにもない。

そこには、涙を拭い立ち上がるとうとする強い心を持った少女がいた
「わかった」

エディは博士の遺体に向き直り、指を組み合わせて祈るように目を閉じた。

「残念だが、遺体を埋葬することはできない。すぐにここを出るぞ」
「……うん。わかったわ」

博士の遺体をこのまま放っておくのは嫌だったが、仕方のないことだった。

ノエルはエディに少し待ってもらおうように言うと、自分の部屋へ走った。

先程炎の魔石を取り出した木箱を開け、その中から指輪を一つ取り出した。

凝った細工が施された指輪だった。虹色に輝く石が嵌め込まれている。

唯一ノエルに残された、母の形見だった。

ほとんど身に着けることなく大切に閉まっていたものだ。

指輪に嵌め込まれている虹色の石は、魔石である。それも、所持者の想像を具現化するという、最も希少価値が高い魔石の一つだ。

ノエルはそれを右手の薬指に嵌めた。

（お母さん……私を守ってください）

記憶の中の母にそう祈ると、ノエルは立ち上がった。

第一章 赤髪の少年（5）

エディは研究所の入り口でノエルを待っていた。

つい先程この場で起こった惨劇が嘘のような、静かな夜だ。

近くに人の気配はしない。まだ騎士団の連中は来ていないようだ。
（それにしても……）

ノエルの強い心には驚かされた。

大切な人を失った悲しみと絶望は、心に深い傷を残す。

助手として常に共にいた博士を突然亡くし、しかも彼を殺害した犯人をその目で見たのだ。

普通なら、あれほどすぐに立ち直れるはずがない。感情的な女性なら尚のことだ。

彼の死を悲しんでいないわけではない。

心から嘆き悲しみ、闇の底に突き落とされたような衝撃を感じていただろう。

それでもノエルは、涙を流すだけでは何も変わらないことを知っていたのだ。

その場にただ座り込むことなく、立ち上がり進むことを選んだ。

「大切な人、か」

エディは空を仰いで呟いた。黄金の瞳が淡い月光に照らされ、静かな光を帯びている。

その時、扉が開いた。

「待たせてごめんなさい」

ノエルだった。多少の荷物を持っている。

「――大丈夫か？」

エディが尋ねると、ノエルは笑って頷いた。

「うん。もう大丈夫」

大丈夫なはずがない。

いくら強い心を持っているとはいえ、普段通りの気持ちでいられるはずがないのだ。

「そうか」

エディはそれ以上言わなかった。

ノエルと並んで、歩き始めようとしたその時だ。

「！」

静寂を乱す違和感が、エディの感覚の網に触れた。

「どうしたの？」

ノエルが尋ねる。

エディは痛烈に舌打ちした。

「――来たか」

「え？」

ノエルは耳を澄ませた。

風の音に混じり、複数の足音が近付いて来る。

ものの数秒で、十数人分の人影がエディとノエルの前に立ちはだかった。

はつきりと姿かたちは見えないが、彼らがどんな出で立ちをしているのかは何となくわかった。

身なりの整った騎士たちだ。

彼らの胸には交差した剣の紋章があった。エディを追っているハイドニア騎士団の紋章である。

剣が鞘から抜かれる音がして、人影分の白刃が月光に煌めく。

「！」

ノエルは反射的に身構えたが、エディは動かない。ただ眼を光らせて前を見据えている。

「よくもまあ、懲りずに追いかけてくるもんだ」

騎士たちの中に銀髪の青年の姿を認めると、エディは呆れたように言った。

一方、ノエルの瞳は青年が身にまとう青い外套を見ていた。

王国中で最も栄誉ある七人の騎士のみが身に着けることのできる、群青色の外套。『桂冠の騎士』である証だ。

（あの人が……ランスロット・アーヴィン！）

銀髪に紺碧の瞳の美青年。『銀の鷹』という異名を持つ、ランスロット・アーヴィンである。

「あんたも苦労人だな、ランスロット」

エディがからかうように言った。

ランスロットは鋭い視線をエディに向けている。

「そう思うのなら、さっさと捕まったらどうだ」

「嫌だね。——そもそも、おれを捕まえたってウロボロスがどうにかなるわけでもない。お偉い騎士様がわざわざ出るほどでもないと思うぜ」

「国王陛下の命だ。貴様を取り逃がすわけにはいかない」

ランスロットはノエルに目を向けた。

「——協力者か」

ノエルは対抗するように、美貌の騎士を睨んだ。

エディはノエルを庇うように、彼女を背に立つ。

「この娘は巻き込まれただけだ」

「何にせよ、貴様と関わった人間を見過ごすことはできない」

ランスロットの合図で、騎士たちが一斉に動いた。

騎士たちの剣がエディとノエルに向かって振り上げられる。

「——！」

ノエルは思わず目を瞑った。

最初に襲いかかってきた騎士の剣が空を切って振り下ろされる。

エディは素手でその剣を受け止めた。

「なっ！」

騎士が驚愕する。有り得ないことだった。しかし、確かに目の前の少年は素手で鋼鉄の刃を受け止めている。

エディの手は金色の光をまといていた。

「そんなもんじゃ、おれは殺せないぜ」

そう言って刃を握る手に力を込める。すると、エディが握っている場所を境に刃が真っ二つに折れた。

「馬鹿な！」

騎士の驚愕も最もである。とてもその光景が現実とは思えなかったが、確かに赤髪の少年は素手で——それも片手で——剣を折ったのだ。

エディの掌が鋼鉄でできているわけでも、彼が驚異的な怪力の持ち主であるわけでもない。

エディは魔法を使ったのだ。

その場の誰もが驚きたじろぐ中、勇気ある——無謀ともいえる——騎士がエディに斬りかかった。

「化け物め！」

エディは騎士の剣が己に届くまで待たなかった。

騎士に向かって片手をかざす。すると、その手から光線が放たれて騎士を直撃した。

「うわあ！」

騎士は大きく後ろに吹っ飛ばされる。

エディは一步も動かず、数秒の間に二人の騎士をまるで子供のようにあしらったのだ。

ノエルもこれには畏怖を覚えた。

どこかに魔石を隠し持っているのだろうか。しかし、見る限りではエディは手ぶらで、魔法具を持っている様子もない。

ふと、エディを見た時の博士の言葉が脳裏をよぎった。

『クロートス王家の瞳だな』

(まさか……)

「もう終わりか？」

エディが挑発的に言う。

その時、今まで動かなかったランスロットが歩み出た。構えた剣が、青い光を帯びる。

「魔法剣か。そういや、あんたとともに戦うのは初めてだな」
エディも身構えた。

『桂冠の騎士』の名は伊達ではない。エディが片手であしらっていた今までの連中とは明らかに別格なのである。

余裕たっぷりの台詞を吐いたものの、エディは内心では焦っていた。

エディ一人ならともかく、ノエルを庇いながら戦うのは難しい。自分以外を気にする余裕を与えるほど、この敵は甘くない。

そうこう考えている間に、ランスロットの剣が襲いかかってきた。咄嗟に光の剣を出現させて防ぐ。

青い光を帯びる剣と、金色の光でできた剣が激しくぶつかり合った。

「くっ……！」

速さも一撃の重さも、桁が違う。

ランスロット自身の卓越した技量を魔法剣が助けているのだ。今までの騎士たちと同格のはずがない。

光の剣にひびが入る。

「虚構の剣で私に勝てるなどと思っているのか！」

ランスロットが更に力を込める。

(まずい……！)

その時だった。

ノエルの右手の薬指から、炎が放たれた。

ノエルが魔法具を発動させたのだ。

細く鋭い炎の矢は、真っ直ぐにランスロット目がけて飛んで行く。

この不意打ちには反応しきれなかったのか、炎はランスロットの右腕に直撃した。

「！」

光の剣を折ろうかというところで、ランスロットの力が緩む。

エディはその隙にランスロットの手から剣を叩き落とし、ノエルを抱きかかえた。

「きゃあっ！」

いきなりのこととで反射的に叫び声を上げてしまったノエルだったが、エディはしっかりとノエルは抱いて、まさに光のような速さで走り出した。

騎士たちが剣を構えて退路を塞いでいるが、エディはそれに突っ込む勢いで走る。

「だめよ、エディ！」

ノエルが悲鳴を上げるが、次の瞬間、目を疑うようなことが起こった。

エディは思い切り踏み切ると、大きく跳躍した。

呆氣にとられる騎士を下に、見事な放物線を描いて少女を抱えた少年が宙を飛ぶ。

驚くべきことに、エディは道を塞ぐ騎士を飛び越えたのだ。さすがの騎士たちも、嘩然とせざるを得なかった。エディに抱きかかえられて驚異的な高さを飛んだノエルも同様だ。

「追え！」

あっという間に遠くなったランスロットの声が響く。素早く反応し、騎士たちが追いかけるが驚異的な速さで駆け抜ける少年には追いつかない。

ノエルは抱きかかえたまま、エディは恐ろしい速さで走り続けた。とても人一人抱きかかえたまま走っているとは思えない速度だ。

寝静まった市街地を駆け抜け、町の出口が見えたところで、ようやくノエルを降ろした。

「走れるな？」

さすがにエディも息を切らしている。

「う、うん」

ノエルはエディに手を引かれ、走って町を出た。

振り返りはしなかった。

第二章 旅の始まり(1)

夢を見た。

随分と昔の夢である。まだ自分とマーリンが組織に所属していた時——共に日々を過ごしていた時のことだ。幼かった自分がそこにいる。

「エディ」

隣にいる人物が自分に声を掛けた。

もう、見ることがなくなつて久しい姿だ。

「何？ マーリン」

自分よりかなり背が高い相手を見上げる。

マーリンは言った。

「人前で無闇に力を使つてはいけないよ」

そうだ——あれは、初めて魔法の使い方を教わった時のことだった。

意味がわからず首を傾げた。

その時、まだ自分は幼かった。心底不思議に思つて聞き返したものだ。

「どうして？」

マーリンはどこか寂しげに言った。

「人間という種族は異端を嫌うからね」

「イタン、って何？」

「普通とは違うこと」

それでも意味がよくわからなかった。

「なんで？ 普通じゃないことのどこがいけないの？」

皆同じなんてつまらないじゃないか。普通でない方がずっといい。

その時はそう考えていた。

「うん、そうだね。私もそう思うよ。けれど、世の中の大半の人は自分たちと違うものを恐れ、虐げようとする。——普通の人間は私たちのように魔法を使うことはできないんだ」

「知ってるよ。ぼくとマーリンは特別だってシモンが言ってた」

自信を持って言うと、マーリンは小さくため息をついた。

「全く、あいつは子供にそういうことを……」

「違うの？」

「エディ、魔法が使えるからといって特別だというわけじゃない。力に溺れる者は必ず報いを受ける。それを忘れてはいけないよ」

言い聞かせるようなその言葉に、大きく頷いた。

「わかった」

「いい子だ」

マーリンはそう言って頭を撫でてくれた。

「子どもあつかいしないでよ」

頬を膨らませたが、マーリンは楽しそうに笑った。

「君はまだ子供だよ」

「ちがうってば！」

「あはは、ごめんごめん」

言葉では謝ってはいるものの、マーリンは声を上げて笑っている。散々笑ってから、ふうと息をついた。

「ただ……」

急に言葉が真剣味を帯びる。表情も真剣だ。

マーリンの金色の瞳は、どこか遠くを見つめていた。

「大切な人を守るためには、持てる力の全てを使うといい」

「人前で使っちゃだめなんじゃないの？」

尋ねると、マーリンはちよつと笑った。

「だから、本当に特別な場合だよ」

「……よくわかんない」

「まだわからなくていい」

そう言って優しく笑いかけてくれた。

「君自身や、君の大切なものが傷付けられそうになった時——全身全霊をかけて守るんだ。一度失ってしまったら、もう二度と元には戻らないのだから」

鳥のさえずりが聴こえる。閉じた瞼に降り注ぐのは、完全に顔を出した太陽だ。

「ん……」

心地よい目覚めだった。ベッドで寝たのは久しぶりなので、いつもよりぐっすりと眠れたらしい。

エディは体を起こし、大きく伸びをした。

（久しぶりに夢を見たな……）

昔の夢を見るなど、珍しいことだった。

度重なる騎士団との追いかっこで、さすがに体が疲れているのだろうか。無意識に昔が懐かしくなっていたのかもしれない。

あの後、エディとノエルは延々と走り続け、マクリーンからかなり離れたイルヴィンという町に辿り着いた。

体を休めるために宿に転がり込んだのは、ほとんど夜明けのことだった。

やっと一息つけたが、ゆっくりしている暇はない。

騎士団に追い付かれる前にこの町を出て、目的地へ少しでも近付かなければならないのだ。

第二章 旅の始まり(2)

「これからどこへ行くの？」

エディの部屋に集まり、二人は話し合っていた。

昨日は何も説明する暇がなかった。ノエルは自分がこれからどこへ行くのかさえ知らないのである。

「北」

エディのあまりにも短い答えに、ノエルは不信そうな顔になった。
「……それだけ？」

生まれを尋ねられた時といい、はっきりと場所を言わない癖でもあるのだろうか。

エディは苦笑した。

「ああ。とりあえずな。マーリンは多分、北にいる」

「北って言ったって、すごく広いのよ。どうやって見付けるの？」

「強いて言えば勘だな」

ノエルは呆れたような表情になった。最もな反応である。

「そんなもので見付けられるの？」

「ああ」

エディは言い切った。

「こういうの、説明するのは難しいんだけど……マーリンの魔力を感じるんだよ。あいつの魔力はとても強いから、おれにはすぐわかる」

「……………」

「マーリンの魔力は今、北から感じるんだ。近付けば近付くほどに気配は強くなっていくから、それでわかる」

ノエルはぴんと来ない様子だが、仕方がない。このような感覚器

官を持たない人に説明するのは、生まれつき目の見えない人に赤とはどのような色かを説明するようなものだった。

「わかった。あなたを信じることに決めただもの。つべこべ言わないことにする」

「思い切りがいいな」

ノエルのこというところに、エディは好感を持った。エディの関わってきた人間は、全て理解しないと気が済まない人種が多かったからだ。

「ねえ、訊きたいことがあるんだけど」

ノエルは探るような眼を目の前の少年に向けた。

「何？」

「あなたは一体、何者なの？」

ノエルはずっとそれを訊きたかったに違いない。

何せ、一瞬でノエルの目の前に現れたり、素手で剣を砕いたり、人一人分の高さを飛び越えたり、普通の人間にはできないことをたくさんやったのだから。

エディは悪戯っぽく笑った。

「人間だよ。一応な」

「それはわかるけど……でも……」

「普通じゃないって？」

ノエルは頷いた。

「だって、信じられないことばかり起きるんだもの。普通の人にはできないことばかり……」

「怖いかな？」

唐突にエディは尋ねた。

「え？」

「昔、マーリンが言ってた。人間は異端を恐れ、排除する傾向が強いって」

「……………」

「普通じゃないことの何が悪いんだって、その時は思った。だけど、

マーリンの言っていたことは正しかったよ。ちょっと力を使えば途端に『化け物!』だもんな。普通の人間だって魔法を使うのにさ。魔石を使っているか使っていないかで、人間と化け物の線引きがされるのかと思ったよ」

エディの声は淡々としていた。その言葉には、何の感情もない。この少年は、どんな過去を背負っているのだろう。ノエルは思った。だが、面と向かって尋ねることはできない。触れれば火傷しそうな、そんな危うさを感じるのだ。

「私は……」

ノエルは真っ直ぐにエディを見た。

「あなたが化け物だなんて思っていない。確かに普通ではないけど、その普通ではない力に私は何度も助けられた。――心から感謝してる」

エディは黙っている。ノエルは続けた。

「それに、私は魔法の研究に関わっているのよ。そんなことを思ったら研究者失格でしょ？」

エディは少し驚いたように目を見張ってから、ぷっと吹き出した。「確かにそうだな」

「そうよ。あなたの力にはとても興味深いものがあるもの」

ノエルも笑った。女の子らしい、可愛い笑顔だ。

「――本当のところさ、おれも自分が何者なのかよくわからないんだ」

ノエルは黙って聞いている。

「マーリンの言うところは――おれはクロートス王家の子孫なんだってさ」

その答えを予想していたのだろうか。ノエルはそこまで驚いた様子でもなく、不思議そうに尋ねた。

「博士に言われた時は違うって言ってたじゃない」

エディは肩をすくめた。

「違うなんて言っていない。適当にごまかしたただけだ。――第一、博

士だって冗談で言ったつもりだっただろうに、『その通りです』なんて言ったら、思いつきり引かれる上に頭のおかしい奴に思われるだろ」

その通りである。

「じゃあ、騎士たちを軽くあしらったのも、光の剣を出したのも、私を抱えて飛んだり走ったりしたのも、全部魔法？」

「ああ」

「そうだったんだ……」

「――信じる？」

「何を？」

「おれの言ってること」

「あんなものを直に見せられたら、信じないわけにはいかないわよ。それよりもね……」

ノエルは目を輝かせた。

「私、今すごく感動してるの」

ノエルが予想もしていなかったことを言ったので、エディは目を見開いた。

「何で？」

ノエルの薄い青の瞳は、これ以上ないくらい生き生きと輝いている。

「だって、研究者たちの永遠の謎とされている、クロートスの王族が目の前にいるのよ？ これほどすごいことってないもの！」

「そ、そうか……それは光栄だ」

ノエルの順応の速さには目を見張るものがある。

「光栄には違いないけど……」

ノエルはさっと真顔に戻り、エディを睨むように見た。エディもノエルを見返す。

「あなたは昔、ウロボロスに所属していたんでしょ」

「……まあ、そうだ」

「あなたは何度も私の命を救ってくれたし、そのことは本当に感謝

してる。でも、ウロボロスを認めることはできないの」

「……………」

「利益のためだけに、大衆の手にあるべき魔石を非合法な手段で手に入れて独占しようとするなんて、私は絶対に許せない」

ノエルの双眸は厳しい光を湛えている。

第二章 旅の始まり(3)

ややあって、エディは口を開いた。

「おれは確かにウロボロスに所属してたけど……ノエルが思ってるようなことには関わってないんだ」

ノエルは怪訝な顔になった。

「どういうこと？」

「ノエルは、ウロボロスはどういう組織だと思ってる？」

「どうって……魔石の密輸組織でしょ？」

エディは腕組みをした。

「それもそうなんだけど、魔石の密輸ってのは——こういう言い方も何だけど——『表の仕事』なんだ」

ノエルは意味がわからない様子で首を傾げた。立派な犯罪である密輸が『表』とはどういうことなのだろうか。

エディは説明を続ける。

「世間には魔石の密輸組織と認識されてるけど、密輸は活動の一端でしかない」

「——じゃあ、本来の活動って何？」

「研究だな。魔法の研究。密輸は研究のための資金集めだ」

ノエルは啞然としてエディを見た。

「研究って——」

エディは言い足す。

「研究って言っても、ノエルや博士がやってたような健全なものじゃない。公式の研究機関ではまずできないようなことばかりさ。」

——人体実験とかな」

人体実験——聞いただけで吐き気がするような言葉だ。無論、人

体実験は禁じられている。

「信じられないかもしれないけど、ウロボロスの技術は国家機関の上を行くと思うぞ。魔石の密輸で集めた潤沢な資金の他に、優秀だが制約だらけの表の研究機関に嫌気が差した奴らが、やりたい放題の研究をしたからな。元王立研究所勤務ってのもいたよ」

「……………」

「話が逸れたけど——おれはその人体実験の材料だった」

淡々と語るエディの声にも表情にも、感情の色は伺えない。

「……………」

「いや、材料って表現は正しくないかもしれない。どちらかというと、観察対象だ。連中にとっておれは『クロートス王家の血を引いているかもしれない』貴重な存在だった。つまり、おれ自身は非人道的な研究をしていたわけでも、魔石の密輸に関わっていたわけでもない。メンバーというほどではないけど、ただの実験材料でもない、中途半端な立場だった。まあ、ウロボロスに関わっていたことには違いないから、ただの言い訳だけだな」

「そう……だったの」

ノエルは視線を落とし謝った。

「よく事情を知らないのに、あんなことを言ってごめんなさい。あなたも辛かったのに……」

エディは首を振った。

「ウロボロスは決して許されるべきじゃない。ノエルが謝る必要はないよ。——おれが酷い扱いを受けずに済んだのは、マーリンのお陰だけだな」

エディの口調が和らぐ。少しだけ、昔を懐かしむような声だった。「マーリンってどんな人？」

ずっと気になっていたことだった。マーリンがどんな人物なのか、エディがマーリンを探している理由も、ノエルは何も知らないのだ。

「おれの育ての親で、ウロボロスの元幹部で、魔法使い」

「魔法使い？」

魔法が実在するこの世界でも、『魔法使い』というとお伽の世界の住人という印象を受ける。人々は魔石があれば魔法を使えるが、魔石がなければ使えない。

最も、クロートス王家の血を引くというエディは例外だ。

魔石を使えば普通の人間も『魔法使い』なのだろうが、魔法を使うことを生業にしている人々も、『魔法使い』と自称することは滅多にない。

「正しくは『魔道士』かな」

『魔法使い』という言葉は馴染みがなくても、『魔道士』という言葉はよく聞く。意味は同じでも、『魔道士』の方が魔法に携わる者を指す言葉として広く使われている。

「でも……魔法使ってことは……」

「マーリンもおれと同じなのさ」

エディは悪戯っぽく笑った。

「同じ、って……クロートスの末裔だってこと？」

「そう。でも、魔法の実力はおれとは比べ物にならないぞ。おれなんてマーリンの足元にも及ばない」

ノエルは信じられないといった様子で、首を振った。

エディを上回る実力の持ち主など、想像もつかない。

「伝説みたいな人が二人もいるなんて……とても信じられない」

エディは苦笑する。

「まあ、それもそうだよな」

「信じられないけど……頑張って信じるわ。主観にとらわれるのはよくないものね」

「そうしてくれるとありがたいよ」

エディは話を戻した。

「まだ物心つく前の子供だった時、おれはマーリンに拾われた。それで、組織に入るようになったんだ。マーリンは創設時からウロボロスに所属していたらしい。組織内での立場は、研究者の統括のよ

うな役目だった」

研究者だったということは、非人道的な研究も行っていたのだろうか。

ノエルの疑問を見透かしたように、エディは続けた。

「でも、他の研究者と同じようなことはしてなかった。部下も使わず、一人で何かやってるって感じだったな。おれもマーリンが具体的にどんな研究をしていたのかは知らない」

「何か特別な研究を任されていたのかしら」

「そうかもしれない。あいつ、幹部らしいことはしてないのに幹部の肩書きを持ってたし、組織内では特別視されてた」

「魔法が使えたから？」

「そうだ。それだけじゃなくて、研究者としてもすごく優秀だった。

ウロボロスの技術の発達には、マーリンの存在が大きい。直接研究には関わっていなかったけど、組織の研究者たちに知識を伝えたのはマーリンだからな」

「……………」

「——マーリンが組織を抜けたのは五年前だった」

エディの表情が陰る。

「本当に急だったよ。それからもう大騒ぎだ。組織は血眼になって探したけど、まだ見つかってない」

「……あなたは、マーリンを探すために組織を抜けたのね」

エディは頷く。

「抜けたのは半年前だけだな」

ノエルは驚いた。そんなに最近だとは思わなかったのだ。

「なぜ四年半も組織に残っていたの？」

「おれはすぐにでもマーリンの後を追いたかったけどな——理由は二つだ。第一に、マーリンがいなくなった時、おれが逃げ出したりしないように監視が付けられた。五年前は、おれを監視してた連中を無理矢理突破する力がなかった。第二に、おれは元々魔力を感知するのは苦手だ。マーリンほどの強い魔力も感知する力がなかった。

「それで、やっと半年前にそれだけの力を得たということ？」

「ああ。今もそこまではつきり感じるわけじゃないけどな」

エディは肩をすくめた。

「組織を抜けたはいいいけど、今度はランスロットに追われる羽目になっちまったのが面倒だ」

ノエルは思わず笑った。

「『面倒』、ね。捕まるかもしれないとは思えないの？」

「まあ、自由に魔法を使える状況にあれば捕まることは有り得ないな」

「だから顔も隠してないのかしら？」

エディほど目立つ容姿をしていれば、自分はここにいると触れ回っているようなものである。それなのにエディは特に顔を隠している様子もない。至って堂々と歩いている。

「ああ。逃げ切る自信はある」

エディがあまりに当然のことに言うので、ノエルは眼を丸くした。

「あなたって結構自信家なのね」

「事実を言ってるだけだ」

エディも笑う。

「話が長くなったな。――それじゃ、そろそろ出るか」

「そうね」

そうそうゆっくりもしていられない。

二人共、必要最低限のものしか持っていないので、まとめるほどの荷物もなくこのまますぐに宿を出られる。

先に部屋を出ようとしたエディの背中に、ノエルは声を掛けた。

「ねえ、エディ」

「うん？」

「どれだけ時間がかかっても、どれだけ危険を冒しても、マーリンに会いたい？」

馬鹿な質問だったかもしれない。

エディとマーリンの間には、並々なぬ絆がある。それは確かなのだが、二人の関係がはつきりとはわからない。

エディはマーリンを『育ての親』と言ったが、親を語る割には『あいつ』と言ったり、どちらかと言うと友達のことを話しているように聞こえるのだ。

エディは間髪入れずに答えた。

「当たり前だ」

「……………」

「——あいつ、おれに何も言わなかったんだ」

エディはノエルに背を向けたまま言った。

「いなくなる前日まで、普通に話してた。まさか、いなくなるなんて思わなかった」

「……………」

「絶対に、何かあるはずなんだ。おれにとってあいつが特別だったように、あいつにとってもおれは特別だった。あいつが意味もなく、ただ組織に嫌気が差したただけでおれの前から消えるはずがない」

エディの言葉を聞きながら、ノエルは内心で彼らを羨ましいと思った。

エディはマーリンを心から信じている。自分が相手にとって大切な存在であると言い切れることも、そこまで心を許せる人間がいることも、心から羨ましく思った。

ふとダルトン博士の笑顔が浮かび、涙が溢れそうになったが、堪えて再び言葉を紡いだ。

「あなたにとって——マーリンはどんな存在？」

エディは微笑して振り返った。

「命の恩人であり、育ての親であり、親友だ」

第二章 旅の始まり(4)

宿屋のロビーに行くと、その場にいた全員がエディたちに注目した。

もちろん、突如現れた美少年に目を奪われているのである。

ノエルは慌ててエディに耳打ちした。

「ねえ、本当に顔を隠さなくて大丈夫？」

この場にいるほとんど全員がエディを見ているのだ。この中に指名手配犯の人相を知っている者がいても不思議ではない。

「顔隠してたらかえって目立つぞ」

「そうかもしれないけど、今も充分目立ちすぎよ。特にその髪。どこに行ったらって注目を浴びるじゃない」

「そうは言ってもなあ……」

だが、髪をどうにかしたところで、エディほどの目立つ容姿の持ち主なら大して変わらないかもしれない。

エディは言い返した。

「ノエルの髪だって充分派手じゃないか」

「私はいいの。金髪の人なんて大勢いるんだから」

ノエルは平然と言い放った。

二人が部屋の隅で言い合っているところへ、大柄な若い男が三人近付いて来た。

エディとノエルはぴたりと会話を止め、その男たちを見上げた。

下卑た笑みを浮かべながら二人を見下ろす彼らは、乱れている身なりからしてまともな生活はしていなさそうだ。そんな輩に宿に泊まるだけの金があるかは疑問だが、彼らの体格を見れば、どのような方法で金を手に入れているか容易に想像できる。

「可愛い嬢ちゃんじゃねえか」

男の一人がノエルを見て言った。

「恋人とお泊りかい？」

「こんな奴放つといて、俺らと来いよ」

三人はエディとノエルを取り囲むようにして、その場から動けないようにした。普通の少年少女なら、これだけで居竦んでしまいそうだ。

「悪いが」

エディが全く恐れた様子もなく言った。

「おれたちは急いでるんだ。どいてくれ」

「ああ？ 随分と生意気じゃねえか」

「目上に対して、口の利き方がなってねえな」

魔法を使わなくてもこの男たちを倒すのは簡単だ。

ただ、公衆の面前で騒ぎを起こすのはよろしくない。穏便に済ませたいが、どうやらこの男たちはやる気満々らしい。

（適当に片付けてさっさと退散するか……）

そう考えた時だった。

もう一つの人影が現れたのだ。

「野暮な真似は感心できねえな」

声の主は、エディたちを取り囲んでいる男たちを遥かに凌駕する、それこそ見上げるような長身の青年だった。

褐色の肌に灰色の髪と眼という容姿の偉丈夫である。正面から見ると短髪に見えるが、長い後ろ髪を背中で結んでいた。

体は鋼のように引き締まっていて、腰には長剣を下げている。騎士というよりは傭兵といった出で立ちだ。

相当戦い慣れた身であることは、すぐにわかった。これほどの長身なのに、すぐ近くに来るまで感覚の鋭いエディも気付かなかった。先の戦いで怪我なのだろうか――右眼には眼帯を付けている。

「なんだあ？ てめえ」

「邪魔するんじゃないよ」

男たちは青年に凄んだが、青年に臆した様子はなく、むしろあくまで気楽に白い歯を見せて笑った。

「そいつら、嫌がってんだろ？ やめておいた方がいいぜ。あんまりその可愛い嬢ちゃんに絡んでると、連れの赤い坊ちゃんが怒っちゃうからよ」

誰が赤い坊ちゃんだ、と思いつながらもエディは黙っていた。

青年の笑顔が男たちの気に障ったらしい。男たちはエディから青年に標的を変えた。

「なめたこと言ってんじゃねえよ！」

男の一人が青年に殴り掛かった。隙だらけだが、力だけはあるそう。うだ。まともに食らえば大怪我だろう。

青年は殴り掛かってきた男の拳を片手で軽く受け流した。体勢を崩したところに、拳を一発叩き込む。

あっという間に、男の体が床に沈んだ。

流れるような一連の動作である。

「こいつ……！」

今度は残りの二人が同時に襲い掛かった。

青年は体勢を低くしてそれをかわし、一人の男の腕をとった。

男の体が宙に浮く。

「なっ！」

投げられた男は何が何だかわからなかっただろう。

青年は残った一人に向かって投げ飛ばし、あっという間に二人を倒した。

ものの数秒である。

これを観戦していた宿の客たちから、歓声が上がった。

青年の鮮やかな手際に、エディも思わず感心していた。相手が多少力を持っているだけの雑魚だったとしても、まるで赤子のようにあしらう青年の技量は並ではないと判断したのだ。

「——どうも、ありがとう」

エディは青年に向かって頭を下げた。

「いんや、別に構わねえよ。ま、俺が出るまでもなかっただろうがな」

「……！」

この青年はエディがただの少年でないことを悟っている。エディが持つ気配——それが、この青年の戦士としての感覚に触れたのだろう。

彼のように戦いに身を置く者——特に熟練した戦士は、信じられないほど鋭い勘を持っている場合が多い。

青年はノエルの顔を覗き込んだ。

「へえ、可愛いなあ。お嬢ちゃん、何て名前？」

「その前に」

エディは青年とノエルの間に割り込んだ。

「自分から名乗るべきじゃないか？」

青年は灰色の瞳を真ん丸に見開くと、次の瞬間には笑い出した。

「それもそうだな！俺はカムイ。そっちは？」

「おれはエディ。こっちはノエルだ」

「エディにノエルね。俺頭悪いから覚えられないかもしれないけどねえけど、よろしくな！」

青年の屈託ない笑顔につられ、ノエルも思わず笑顔になった。

「よろしく、カムイ。さっきはどうもありがとう」

「可愛い子が困ってたら助けるのは当たり前だろ？」

「それにしても、カムイって珍しい名前ね。他国の出身？」

カムイは大きく頷いた。

「そ。南の方の出身。だから肌もこんな色なんだよ」

そう言われてエディとノエルは納得した。

「でさ、助けた代わりと言っちゃなんだが……」

カムイは灰色の頭をぽりぽり掻きながら言った。

「俺を雇ってくれねえか？」

第二章 旅の始まり(5)

エディとノエルは呆氣にとられた。

「俺、自由戦士なんだ」

カムイは言った。

「自由戦士？」

「ま、傭兵みたいなもんだ。最近は用心棒をやってるんだけどさ。

——実は今、失業中なんだよ」

エディはため息をついた。

「それで、おれたちにお前を雇えって言うのか？」

年上に対して随分な口の利き方だが、カムイは全く気にした様子もない。

「俺が持つてるものといやあ、この腕つぶししかねえからな。依頼主がいなきゃ食ってけねえんだよ」

「無理だ」

エディはきっぱりと言った。

「おれたちに用心棒を雇うだけの金はないし、第一用心棒なんて必要ない」

「そりゃあ、あんたが強いのはわかるけどよ。子供二人じゃ何かと不便だぜ？ 格安で引き受けるから頼む！」

「だめだ」

事情を知らない人間を巻き込むわけにはいかないし、まだカムイは気付いていないようだが、エディは指名手配犯なのだ。下手に騒がれたら面倒なことになる。

「……ねえ、エディ」

ノエルが言った。

「雇う訳にはいかないかしら？」

「ノエル！」

「さっすが嬢ちゃん！」

エディとカムイの声が重なる。

まさかノエルがそんなことを言い出すとは思わなかったので、エディは驚きながらもノエルに言い聞かせた。

「おれたちの立場をわかってるのか？ 事情を知らない第三者と行動できるわけないだろ」

「そうだけど……でも、私たちだけじゃ不便なもの確かよ」

そこで、カムイが口を開いた。

「嬢ちゃんたち、訳ありか？」

「お前に言う必要はない」

普通の人間がこんな言葉を浴びせられたらたちまち気を悪くするに違いないが、カムイはそういった精神を持ち合わせていないらしい。

「その歳の子供が二人で——しかも兄妹でもないのに——宿屋に泊ってるなんて奇妙なもんだぜ」

「人探しをしているの」

ノエルが答えた。

「へえ、大変だなあ。だったら尚更大勢の方がいいじゃねえか。俺はハイドニア中を転々としてっから、知り合いも多いぜ」

「必要ない！」

ここまでむきになるのも、エディらしからぬことだった。

その時、カムイは何かを思い出したかのようにエディをまじまじと見た。

「赤い髪に金色の瞳……お前、まさか」

エディの顔色がさっと変わった。

指名手配犯と気付かれたか——？

早く逃げなければ。

咄嗟にノエルの手を引こうとした時、カムイの口から信じられな

い言葉が飛び出した。

「マーリンの息子のエドワードか？」

カムイの言葉に、エディは金色の瞳を一杯に見開いた。ノエルも同様だ。

二の句が継がないでいると、カムイは納得したように手を叩いた。

「——そうなんだな？」

「……お前」

エディは喘ぐように言った。

「なぜマーリンを知ってる？」

「この眼」

カムイは眼帯を付けている右眼を指差した。

「三年前、商隊の護衛をした時に山賊に出くわしてよ。ぐさりとやられちゃったんだ。死にそうになりながらも目的地の村に着いて、その小さな診療所に運び込まれたんだよ」

「……………」

「誰も俺が助かるとは思ってなかっただろうが、なんと、その診療所にいた医者が綺麗に治してくれたんだよ。お陰で俺は今もこうして生きてるってわけ」

「その医者が、マーリンだったのか？」

「そういうこと。——本物の魔法使いだぜ。俺の傷を治してくれただけじゃなく、義眼まで入れて、抉られた眼を元通りにしてくれたんだからな」

「義眼？」

この問いはノエルである。義眼など、現在の医療技術では開発されていない。義眼どころか義肢も夢物語のような時代である。

カムイはにやりと笑った。

「そこがあの魔法使いのすごいところだ。今の俺の右眼に入ってるのはな、魔石なんだよ」

ノエルは驚愕に目を見開いた。魔石を人間の眼に代用することなど、できるはずがない。

「マーリンなら、不可能じゃない」

エディが真剣に言った。

「そうそう。誰に言っても信じてくれなかったけどな」

「その眼……見えるの？」

「おうよ。自前の眼とはかなり違うんでこうして隠してるが、ちゃんと見えるぜ。それどころか普通の眼より遥かに便利だ。壁の向こうや後ろ側まではっきり見える」

ノエルにはとても信じられなかった。しかし、エディはマーリンならそれが可能だと言っている。

本当にマーリンがそんな技術を持っているのだとしたら大変なことだ。

「傷が完治するまでマーリンに世話になってた。その間に育ての息子の話を聞いたんだよ。名前はエドワード・クライス。赤い髪に金色の瞳の、やたら目立つ魔法使いの美少年だったな」

「おれとマーリンが魔法を使えることも知ってるのか？」

「ああ。色々と話してくれたよ。——ウロボロスにいたこともな」

「……そうか」

マーリンがそこまでのことを話したのだとしたら、この男は信用に足る人物だ。エディはそう判断した。

「マーリンはどこにいる？」

「やっぱり、探し人ってのはマーリンか？」

「ああ」

「ゼスタ地方のログナルって村だ。アドナ山脈の麓にある。まあ、三年経ってるから今もそこにいるとは言いきれないがな」

ゼスタ地方はアドナ山脈によって東西南の三地方と隔てられている、ハイドニア王国の北にある地方だ。

アドナ山脈は王国を横断する大山脈である。魔石の鉱床が数多くあり、いくつもの魔石鉱を形成している。

「やっぱり北か……」

「行くんだろ？」

カムイは不敵に笑っている。

「ローグナルまで辿り着くには、道を知らないとかなりきついで。おまけに、厄介な連中に追われてるみたいだしな」

「……………」

カムイはエディが騎士団に追われていることも知っていたようだ。

「俺の力が必要になると思うぜ？」

エディは観念して肩をすくめた。

「ついてくるなら止めはしない。ただ、断っておくぞ」

「おう」

「金は払えない」

エディの真面目な言葉にカムイは苦笑した。

「金なんざいらねえよ。三年前も、マールリンはただ俺を診てくれたからな。その息子から金を取るわけにはいかねえだろ」

「決まりだ」

少々ひょうきんすぎるがこの男は戦力になるだろうし、何より信用できる。

ノエルも笑顔になった。

「仲間が増えて心強いわ」

「俺もこんな可愛い嬢ちゃんと一緒に嬉しいぜ」

「おい」

エディがそれはそれは鋭い目つきでカムイを睨む。

「変な真似はするなよ」

「こんなおつかねえ彼氏がいるのにそんなことできるわけねえよ」

「別に彼氏じゃない。昨日会ったばかりだ」

エディは必要以上に仏頂面で答えた。

カムイはからかうような笑みを浮かべる。

「お？ むきになるところが怪しいねえ」

常に冷静沈着なエディも、カムイには調子を狂わせられるようだ。

「うるさい。置いてくぞ」

ノエルはただ苦笑するしかなかった。

あまりにも人間離れているこの少年にも、こんな一面があったのかと思うと微笑ましい気持ちになった。

第三章 闇の鳴動（1）

ハイドニア王国の政治経済、商業など全てが集結する、王都エルフォード。

都の中心には大陸中で最も美しいと謳われる白亜の宮殿、エルフォード城がある。

国王の御座すこの城は、何重もの城壁に守られている上に、魔法による侵入を阻むための結界も張り巡らされている。

その堅固な城の中心であり最奥にある本宮に、ランスロットの姿があつた。

鮮麗な青い外套を翻し、一人廊下を歩いている。

エドワード・クライスを追っていたはずの彼は、突然の国王の呼び出しを受け、エディの追跡を一時中断し急遽王宮へ上がったのである。

その理由は、長引く追跡劇と先日のマクリーンで起こった殺人事件であるとランスロットは考えていた。

エドワードの身柄拘束命令がランスロットに下されたのは、二月ほど前だ。当初は『桂冠の騎士』直々の出動ということで、逮捕は時間の問題とされていた。

しかし、あの少年は度重なる騎士団の追撃をことごとくかわし、未だ逃走を続けている。

エドワードにかかっている容疑は、ウロボロスへの関与――そして、殺人である。

数日前、マクリーンで殺人事件が起こった。

被害者は魔石研究の権威であるダルトン博士。

エドワードはダルトン博士の研究所に滞在していたと見られ、エ

ドワードの逃走後、研究所に入った騎士団がダルトン博士の遺体を発見した。

最も有力な犯人はエドワードではあるが、容疑者はもう一人いる。その名はノエル・ブライト。

ダルトン博士の助手であったが、マクリーンでの一件以来、エドワードと共に行動していると見られる。彼女がエドワードと共に逃走するところは、ランスロットを始めとする騎士たちが目撃した。

エドワードとノエルの関係や動機は不明であるが、二人が協力してダルトン博士を殺害したことも考えられる。

（いずれにせよ、捜査は続けなければならない。二人が事件の鍵を握っていることは違いないのだ……）

ダルトン博士殺害の犯人がエドワードに決まったわけではないが、もし彼が犯人であれば、ランスロットの失態である。

もっと早くにエドワードを逮捕していれば、ダルトン博士は殺されなかったかもしれないのだ。

（厳しい処罰が下されるかもしれない。だが、私が引き起こした失態だ。甘んじて罰を受けよう）

最悪の場合、『桂冠の騎士』の称号を剥奪されるかもしれない。地位が惜しいわけではない。ただ、自分が不甲斐ないばかりに他人から後ろ指をさされるかもしれない家族のことを思うと、胸が痛んだ。

「ランスロット殿ではないか」

ランスロットの背中に声がかかった。

立ち止まり振り向くと、そこにはランスロットと同じ青い外套をまとった男が立っていた。

年齢は三十代半ば程度だろうか。獅子の鬣たてがみのような金髪と、琥珀色の瞳を持つ長身の男性である。

「――パーシヴァル殿」

『桂冠の騎士』の一人であり、『金の獅子』の異名をとるルイス・パーシヴァルであった。

数年前、まだ十代だったランスロットが『桂冠の騎士』の称号を得ることに最後まで反対していた人物でもあり、今もランスロットを快く思っていない。

「ウロボロスの手掛かりである小僧を追っていたはずではなかったか？　なぜ王都にいる」

低く響く、まさに獅子のような声だ。

「国王陛下の命です」

パーシヴァルは嘲るように笑った。

「お叱りを受けるといふ訳か。たった一匹の小僧相手にこの体たらくでは仕方あるまい」

「……………」

「この程度の任務をこなせぬようでは、称号の返上を命じられてもおかしくはない。やはり、貴殿のような若者に『桂冠の騎士』の位は重かったようだな。それとも、陛下に泣きつき身に余る称号を持ち続けるか？」

ランスロットはパーシヴァルを真っ直ぐに見据えた。青と琥珀の視線がぶつかる。

「私は己の責務を全うするつもりです。いかなる罰が下されようとも、それから逃げるようなことは致しません」

パーシヴァルは眉を顰めた。

「ふん、口先だけは達者なようだな」

二人が静かに睨み合っているところへ、三つ目の声が割って入った。

「お取り込み中、失礼致します」

流れるように滑らかで、心地良く響く低い声だった。

ランスロットとパーシヴァルは弾かれたように声の主を見た。

二十代後半に見える男だった。背中を中心辺りまで長く伸ばした髪は漆黒で、瞳は刃を思わせる鈍色だ。身にまとうローブもまた黒く、まるで闇の使者のようである。

彼のまとう空気は恐ろしく冷たかった。雰囲気だけでなく、その

冷たい美貌がそう思わせているのかもしれない。

肌は白く、背は高いが体の線は全体的に細い。女性と見紛うかのような中性的な顔立ちが印象的で、さながら氷でできた花だ。この男の前ではどんな美女も霞んでしまうに違いない。

見た目は若いのに表情は落ち着き払い、冷たく静かな雰囲気を漂わせている。

男は凄腕の騎士であるランスロットとパーシヴァルに全く気配を感じさせないまま、すぐ近くに寄って来たのだ。

「シモン殿……」

ランスロットはすぐ近くまで近寄られていたのに全く気付かなかった己を叱咤し、男の名を呼んだ。

シモンと呼ばれた男はランスロットに向き直った。

「ランスロット様、少しよろしいでしょうか」

不気味なほど落ち着いた声である。

「しかし、私は陛下に……」

「ご心配なく。私が陛下に代わり、お話をするようになりましたので」

シモンはパーシヴァルに向かって頭を下げた。

「パーシヴァル様、お取込み中申し訳ございませんでした。すぐに済みますので、続きはそれから……」

「ふん、これ以上話すことなどない」

パーシヴァルは外套を翻し、その場を去った。

シモンは何事もなかったかのようにランスロットに向き直る。

「では、こちらへ」

シモンは国王お抱えの魔道士である。

数年前突然現れてから瞬く間に国王の信頼を得、大臣たちを差し置いて国王に助言を与えるまでの立場になった。

ランスロットは詳しく知らないが、予言や占いのようなことをしていたらしい。

しかし頭は相当切れ、ただの魔道士だけに留まらず、今や国王の相談役だ。

以来、国王の傍らには常にこの男の姿を見るようになったのである。

国王はこの男に誑たぶらかされている、とシモンを快く思わない者は多い。

即刻シモンを王宮から追放すべきと主張する臣下もいた。しかし、そんな考えを持つ寵臣たちの意見をはねつけてしまうほど、国王のシモンに対する信頼は絶大なものになっていたのだ。

気に入らないというほどではないが、ランスロットもシモンのことは警戒していた。

賢王として知られた現国王が、今やシモンの言いなりである。

優秀なものには違い不大的が、不気味な男だとランスロットは思っていた。

「エドワード・クライスの件、手こずっているようですね」

シモンは感情を感じさせない声で言った。

「先日、マクリーンで遂に殺人を犯したとか。被害者は魔石の権威、ダルトン博士でしたね」

「それに関しては私の責任です。称号の剥奪も覚悟しています」

「気が早いですね」

シモンは微笑を浮かべた。美しいだけに、ぞっとするような不気味さを含んでいる笑みだった。

「まだエドワードが犯人と決まったわけではありません。彼と共に逃亡した少女も容疑者でしょう。――それに、あなたはとても優秀だ。あなたは失うにはあまりに惜しいと陛下もお考えです」

「……………」

「引き続き、エドワードの動向を追ってください。陛下はあなたに期待していらっしゃいます」

「……それだけ、ですか」

「ええ」

すっかり罰を受ける気でいたので、思わず拍子抜けしてしまった。シモンはランスロットの胸の内を見透かしたかのように言った。

「真面目で忠義の厚いあなたのことです。責任を感じているだろうと陛下が仰いましたので、何かお言葉をお掛けになったらどうかと私が進言したのです。生憎陛下のご都合が合わず、恐縮ですが、私が代理を務めさせていただきますました」

そしてシモンはふと視線を横に流した。

「エドワードは普通の人間とは違う。手こずるのも無理はありません」

「どういうことですか」

「あなたもご覧になったでしょう。彼の力を」

あの魔法。あの身体能力。普通の人間ではないことはわかっている。

「彼が普通でないことはわかっています。魔石を使った様子もないのに、魔法を操っていた。――あなたはエドワードが何者かを知っているのですか、と言っているのです」

シモンの口ぶりは、いかにもエドワードを前々からよく知っているようだった。

「そうですね、知っています。私も魔法に携わる者ですから」

魔法に携わる身としては、エドワードの能力は興味深い――という意味なのだろうか。

「それならば、お訊ねするが――エドワード・クライスは何者なのです」

ランスロットが尋ねると、シモンは謎めいた微笑を浮かべた。

「言ったところで、あなたが信じるとは思えません」

「私には知る権利があるはずだ」

思わず声が荒くなった。シモンは少し目を見張ると、頷いた。

「――それもそうですね。信じるか否かはあなた次第ですが――単

刀直入に言う、エドワードはクロートス王家の末裔なのです」

「――は？」

クロートス。名前は知っていた。魔法を操るという王族が支配し、大昔に繁栄した国だ。そしてそれが実在したことも知っている。

しかし、かつてその身一つで魔法を使ったという者たちの子孫が残っているなど、有り得ない。

思わず言い返していた。

「冗談でしょう？」

しかし、シモンは全く表情を変えない。

「言ったはずですよ。あなたが信じるとは思えないと」

「……………」

「エドワードはクロートス王家の血を引いています。故に魔石を使わずに魔法を操ることができるのです」

到底信じられない。

しかし、あの少年ならば有り得るかもしれない――と心の隅でそう思っていた。

そして、別の疑問が浮かぶ。

「シモン殿、なぜあなたはそんなことを知っているのですか。ウロボロスの構成員であったエドワードの素性を、なぜ？」

ランスロットの鋭い視線を、シモンは微笑で受け止めた。

「それはあなたの知るところではありません」

「では、あなたは何者のですか」

「それも、あなたの知るところではありません」

「……………」

シモンは相変わらず、不気味なほど落ち着いている。

「あなたが私をどう思おうと勝手です。陛下に何を進言しても構いません。エドワードを知っているのは間違いありませんので」

国王に告げ口しても、どうすることもできない。国王は自分の言いなりなのだから。

暗にそう言われたのだ。

確かに、シモンとウロボロスの繋がりを示したところで国王は自分の声などに耳を貸さないだろう。それをわかっているからこそ、シモンはこんなことを伝えたのだ。

（この男、何を企んでいる？）

シモンは微笑を浮かべるばかりだ。

「……失礼します」

「お気を付けて。くれぐれも、ご無理をなさいませんよう」

シモンの言葉を背中で受け止め、ランスロットは部屋を出た。

第三章 闇の鳴動（2）

ランスロットが去り、一人部屋に残ったシモンは何もない虚空を見つめていた。

見つめられたものは全て凍り付いてしまうかのような、冷たい光を宿す瞳。真っ直ぐに流れ落ちる漆黒の髪。色素が欠落しているかのように白い肌。

決して融けることのない氷の彫像のようであった。

ただ美しいだけではない。見る者の心を虜にしながらも、近付くことは許さない――そんな刃をまとっている。

そのシモンがかすかに動いた次の瞬間、

「よう、シモン」

どこからか、陽気な声がかかった。

すると、シモンの背後に突如男が現れた。扉から入ってきたわけではない。まさにその場に『出現した』のだ。

魔法による侵入は結界によって阻まれているが、シモンの力を以てすれば、気付かれないように結界にごく小さな穴を空けることは容易い。

男はシモンの空けた『穴』を通して来たのだ。

現れたのは、茶がかかった金髪に濃緑の瞳を持つ若い男だった。

歳は二十代前半だろう。

黒い服に身を包み、腰には長剣を差している。

「何の用だ、レオン」

シモンはレオンの方を見ずに言った。

「報告に来たぜ。指示通りダルトンを殺した」

「知っている。貴様は報告が遅すぎるのだ」

レオンは肩をすくめて苦笑した。

「悪い悪い。だがもう一つ報告がある」

「何だ」

「エディに会った」

シモンは初めてレオンに視線を向けた。

「ダルトンの助手と一緒に逃げたみたいだぜ」

「……エドワードがマクリーンにいたことは知っている」

「あれ？ 知ってた？」

「おまけにダルトン殺害の容疑をかけられている」

「本当かよ」

レオンは緑の瞳を真ん丸にして驚いている。

シモンは思わずため息をついた。

「ダルトンの研究所で騎士団の連中と出くわしたようだな。研究所でダルトンの遺体が発見され、エドワードは最有力の容疑者となっている」

「二番目はエディと一緒に逃げた女の子？」

シモンは頷く。

レオンは片手で頭をがしと掻いた。

「でもなあ……ランスロットだったわけ？ エディを捕まえられるのかよ？ あいつ、強いぜ。魔法を使わなくたって普通の人間より遥かに強い」

「ランスロットも申し分なく強い。史上最年少で『桂冠の騎士』になっただけのことはある」

レオンはからかうように笑った。

「へえ、珍しいな。あんたが他人のことを褒めるなんて。——戦ってみたくなった」

「やめておけ。ランスロットは使える。——むざむざと死なせるような真似はしたくない」

「せっかく強い奴と戦えると思ったのに」

レオンが不満そうに言うと、シモンの刃の鋭さを持つ視線が彼を

射抜いた。

「奴は普通の人間だ。剣の技量は常人離れしていても、体はあくまで手を加えていない普通の人間なのだ。お前に敵うわけがなからう」
「それもそうか。あーあ、エディがいなくなっちゃまってつまらねえなあ。あいつ、俺のいい遊び相手だったのに」

「そのエドワードの動向はわかってるのだろうな」
するとレオンは気まずそうに視線を逸らした。

「それが、見失っちゃまって……」

シモンは再びため息をつく。

「――仕方あるまい。ディアナに後を追わせる。お前は大人しくしていろ」

「ディアナ？ あいつ、マーリンを探してたはずじゃなかったか？」

「エドワードはマーリンを追っている。我々ではマーリンの魔力を感知できん。エドワードを追えば自ずとマーリンに辿り着く。無闇にマーリンを探すより効率的だ」

「なるほど！」

レオンは素直に手を打った。

「それにしても、どこにいるのかねえ……マーリンが見付からなきゃ、計画がおじやんになるんじゃないかねえか？ ダルトンが開発したのは不完全品なんだろう？」

「確かに不完全ではあるが、あれでも絶大な力を持っている。使わない手はない」

シモンは呟くように言った。

「一刻も早く、完全なエリクシルを手に入れる。――我らの目的のために」

ウロボロス

第四章 運命の導者（1）

闇と静寂が支配する深い夜。

夜空には星が散りばめられ、月は冴えた光を放ってはいるものの、夜の闇がそれらの光を吸い込んでしまっていた。

煌々とランプに照らされた室内で、一人の女性がうつむきながら椅子に座っていた。

両目を閉じているので眠っているように見えるが、そうではない。その女性――セシリアはふと顔を上げた。

「これは……」

セシリアの両目は閉じられたままだ。

「光が近付いている……一点の闇も持たない、強い光……」

セシリアの薄い唇から紡がれる言葉が、闇に吸い込まれて消えていく。

「現世にはびこる邪悪を払うために降臨されたというのか……」

「へえ、ここがメルカーレか！」

カムイが感嘆の声を上げた。

エディたち三人が訪れたのは、カムイと出会ったイルヴィンの北に位置する街だ。

アトレイス地方では、王都エルフォードに次ぐ第二の都市と言われているほど賑わっている街だ。

ノエルがいた地方の町とは比べ物にならないくらい大きな建物が立ち並び、さすがは大都市といった印象だ。

何よりも、行き交う人々の量が違う。

「す、すごい人の多さね……」

ノエルもこのような都会に来たのはほとんど初めてなので、あまりの人通りの多さに眩暈さえ覚えた。

「うまそうな食べ物が一杯売ってるなあ」

とカムイ。一番はしゃいでいるのは一番年上の彼だ。

エディは呆れたようにカムイを見た。

「あのなあ……遊びに来たんじゃないんだぞ」

「そりゃあそうだけだよ、ちよつくら楽しんだっていいだろう？」

カムイの言動にエディがため息をつくのは、ここ数日ですっかり慣れ親しんだ光景となった。

「明日にはここを出るからな。追手が来るかもしれない」

「そうは言っても、俺がお前らと会ってから一度もそれらしき奴には会ってねえぜ？」

確かに、イルヴィンを出てから騎士団と遭遇したことはなかった。

「そこまで急ぐ必要もないんじゃないかい？」

「あいっただけじゃない……」

エディは低く呟いた。

「ウロボロスもおれを連れ戻しに来るかもしれない。そうなれば、騎士団よりも厄介だ」

ノエルははっと顔を曇らせたが、カムイはどこまでも明るかった。

「大丈夫大丈夫。この俺が何とかするって！」

「……お前は本当に樂觀的な奴だな」

「悲観したってどうしようもないだろう？ 大体、お前が暗すぎるんだよ。若いくせに」

「おれは現実的なだけだ。お前が年上のくせに子供っぽすぎるんだろ」

「おいおい、少しは年上を敬えよ」

「お前みたいなのを敬えるか」

「可愛くねえなあ、全く」

ノエルは二人のやり取りを聞いて、ぷつと吹き出してしまった。

「何笑ってるんだよ」

エディが言う。

「だ、だって……」

「そういえば、エディは全然笑わねえよなあ。いつつも仏頂面で」
言われてみれば、とノエルは思った。微笑むようなことはあっても、声を上げて笑ったりするところは見ることがない。

「笑わないわけじゃない」

エディが無表情のまま言った。

「でも、俺は見たことないぜ」

「お前がいつもへらへらしてるから、釣り合いがとれて丁度いいだろ」

取りつく島もないエディに、カムイは肩をすくめた。

そろそろ陽が傾きかけている。三人は宿を探すために大通りを歩いていた。

やはり旅人が多いのか、通りには宿屋が軒を連ねている。

「さすが、大きい街は違うねえ。よりどりみどりだぜ」

「こんなに多いと迷うわね」

「言っておくけどな」

先を歩くエディが二人を振り向いて言った。

「おれたちは金がないんだ。一番安いところに泊まるぞ」

三人分合わせても、持ち金は二万ピュールに満たない。しかも、最初からエディとカムイは全くと言っていいほど持っていなかったもので、ほとんどがノエルの持っていたものだ。

カムイは辺りを見回した。

「って言ってもなあ……どれも立派で高そうだぜ」

確かに、イルヴィンの宿屋とは比べ物にならないくらい建物も大

きく、綺麗だ。値段も相当張るだろう。

「ただで泊めてくれる親切な人はいないもんかね？」

「いるわけないだろ」

エディがあっさり切り捨てる。

その時、建物の隙間にある狭い路地から、言い争うような声が聞こえてきた。

「もういいでしょ！ あたしは今のままがいいの！」

「馬鹿を言うな！ あんな奴のところになんて冗談じゃない！」

三人とも、思わず声のする方向を見た。

見ると、若い男女が言い争っていた。

「なんだあ？」

カムイが身を乗り出してそちらを見た。

片方は十五、六歳に見える少女だ。もう一人の方は二十歳くらいの青年だろうか。

青年は少女の腕を掴み、少女は必死にそれを振り解こうとしている。

「修羅場？」

カムイが小さくエディに言う。

「……さあな。何にしても、おれたちが関わることじゃない」

そう言ってエディはその場を去ろうとしたが、ノエルは躊躇った。その時一瞬だけ、少女と眼が合った。

——助けてください。

そう言われたような気がした。

「あの！」

ノエルは自分でも気が付かないうちに声を発していた。

青年がじろりとノエルを見る。

「何だ？ あんたは」

「彼女、嫌がってます。放してあげてください」

二人に歩み寄り、負けじと青年を見上げた。その横では、少女が

ほっとした表情でノエルを見ている。

「あんたには関係ないだろう」

「おい、ノエル！」

後ろから慌ててエディとカムイが来た。

青年と少女は突如現れた赤い髪的美少年に目を奪われたが、青年ははっと目を逸らし、責任者らしい（少なくとも見た目は一番年上の）カムイに話かけた。

「あんたの連れか？」

「そうだけど」

「さっさと連れて行ってくれ。話を中断されて迷惑だ」

そう言ってまた少女に向き直る。

「おい、ティナ。いい加減家に戻って来い。父さんも母さんも心配している」

どうやら、この二人は恋人ではなく兄妹らしい。

ティナと呼ばれた少女は兄を強く睨み、首を振った。

「嫌。さっきから言ってるでしょ」

「いい加減にしろ！」

「嫌なものは嫌なの！ 兄さんも父さんも母さんも、セシリア様のこと何にもわかってないくせに！」

「とにかく、あの女のところへ行くことは許さん。来い！」

青年がティナの腕を強く引っ張った。

「やめて！」

ティナは悲鳴を上げる。

その時、カムイが青年の腕を掴んだ。

「……その手を離せ」

「無理矢理ってのは感心しないぜ」

青年はカムイの腕を振り払おうとしたが、カムイの力は緩められない。

「大体、何なんだあんたたちは！ 急にしゃしゃり出て来て一体何のつもりだ！」

「まあ、とりあえず落ち着いて。そんなに興奮してたらまとまるものもまとまらねえって」

青年は舌打ちした。

「あんたたちに言われる筋合いはない。――ティナ、行くぞ」

青年は再びティナの手を引こうとしたが、ティナはさっと身を引いた。

そして近くに立っていたエディの背に隠れ、兄に向かって下を出す。

「べーだ！ 兄さんのわからずや！ いいもん、あたしこの人と結婚するから！」

その場の誰もが声を失った。ティナ以外の四人はあんどりと口を開き啞然とした。

ティナは硬直している四人をよそに、するりとエディの腕を取った。

「あたしたち、将来を誓い合ってるの。セシリア様もあたしたちを祝福してくれたわ」

淀みなくすらすらと言う。

エディは啞然としながらも口を出そうとしたが、青年の方が先だった。

「な、何だと……」

驚くべきことに、彼は妹の言葉を信じたらしい。唇をわなわな震えさせている。

「そ、そんなことを父さんが許すと思っているのか！ け、けけけ結婚だなんて！ お前はまだ十五だぞ！」

「あら、十五歳で結婚なんてそんなに珍しくないわよ。それに父さんなんか関係ないもん。あたしたちは愛し合ってるの」

青年は顔面蒼白になった。

急遽『将来を誓い合った相手』と宣言されたエディは完全に突っ込むタイミングを失った。

「ば、馬鹿な！ おい、君！ う、うちの妹を誑かしたのか！」

予想外の攻撃を受けエディはたじろいだが、すかさずティナが前に出る。

「ちょっと兄さん、唾飛ばして怒鳴らないでくれる？ 汚いわ」

「な、なな……！」

「もう、こんな人放つといて行きましょ」

そう言っにつこりとエディに笑いかける。

口をぱくぱくさせている兄を置いて、ティナはエディの腕を引きその場を去った。

固まっていたノエルとカムイも我に返り、顔を見合わせて慌てて後続く。

その時、カムイは後ろを振り向き、

「……ご愁傷様」

と気の毒な兄に言った。

第四章 運命の導者（2）

「本当にありがとうございました！」

言い争いがあった場所から離れた喫茶店に四人はいた。

ティナは深く頭を下げてお礼を言った。

「エディさん、でしたよね。あんな嘘ついてごめんなさい。でもうまく兄さんを騙せてよかったわ」

エディは呆れてため息をついた。

「あんな嘘に騙されるなんて、随分純粹だな」

「兄さん、良くも悪くも真面目な人だから」

ティナが苦笑して言うど、エディも笑った。

「いい加減、妹離れして欲しいな」

「本当、そう思います」

エディの笑顔を初めて見たカムイの「女の子の前でしか笑わないんじゃないの」という呟きは、幸いにもエディの耳には届かなかったようだ。

「それと――ノエルさん。本当にありがとう。あ、もちろんカムイさんにも感謝してます！でも、最初にノエルさんが来てくれなかったら、あのまま連れ戻されてたかも……」

「そのことだけど、連れ戻されるって？ 家出中なの？」

「家出ってわけじゃないけど――兄さんたちにしてみれば家出同然だと思えます」

ティナはメルカーレの郊外で、セシリアという女性と共に暮らしているのだと言う。実家はメルカーレにあるが、セシリアの元で暮らすようになってから、家には一度も帰っていないらしい。

生活必需品を買い出しに来ている途中、メルカーレに両親と共に住んでいる兄に偶然見つかってしまったということだった。

「セシリア様は不思議な力を持っていて……未来を見通す眼をお持ちなんです」

「予言者か」

エディが言った。

魔石を使わなければ魔法を使えない時代だが、占い師や予言者といった類の術者は多くいる。

それらは魔法ではなく、独自の技術によって行われるものだ。

大概は本物ではないが、ごくごくたまに——本当の『力』を持つ者がいることをエディは知っていた。

「ええ。セシリア様はその辺にいる占い師とは違って、本当に力をお持ちなんです。おまけに——その、昔から歳をとられていないんです。あたしのおばあちゃんが子供の時から、若い女性の姿のままなんだそうです」

ノエルとカムイは目を？いた。

「……歳をとらない？」

「はい。信じられないかもしれないけど、本当にそうなんです。あたしも何年も前からセシリア様を知っているけど、全く変わっていません」

「……………」

「それもあって——街の人にはセシリア様を気味悪がる人もいます。あたしの家族もそうです」

ティナがセシリアと共に暮らし始めたのは、一年前からだと言う。「セシリア様は未来を見る力はあるけれど、視力を失っているんです。だから、誰かがお世話しなくちゃいけないのに、皆しようとしてない。セシリア様はご自分の力を使って、嵐の来る時期を教えてくださいたりして——この街は何回もセシリア様に助けられているのに」

ティナは強く拳を握りしめた。

「だから、あたしはセシリア様にお仕えすることにしました。なのに、家族はそれをわかってくれなくて」

その時、ノエルは自分とティナを重ねていた。

ノエルがダルトン博士の助手になると言った時も、同じだった。養い親である叔父夫婦は、ティナの兄と同じようにノエルを止めて、時には連れ戻そうとした。

なぜわかってくれないのだろうとその時は思っていた。しかし、今ならそれは自分の身を心配してくれていたのだとわかる。

この少女も、かつての自分と同じなのだろう。

ノエルは優しく話し掛けた。

「でも――ティナ。ご家族はあなたを心配しているのよ。あなたのような少女が一人でお世話をしているんだから、心配して当然だわ」
ティナは不満そうに頬を膨らませた。

「それはそうだけど……でも、あたしの希望を聞いてくれたっていいじゃないですか」

「うん、私もそう思う。だから、お兄さんたちとゆっくり話した方がいいと思うわ」

「話しても、きつとわかってくれませんよ」

ノエルは首を振った。

「そんなことはないわ。皆、あなたのことを大切に思ってるの。あなたの思っていることを――あなたの信念を話し続ければ、きつとわかってくれるよ」

「……………」

「あなたも、お兄さんたちをわからずやだなんて決めつけないで、一度ゆっくり話し合ってみるべきじゃない？」

ティナは納得しがたいような顔つきだったが、やがて頷いた。

「……わかりました」

話が終わったのを見届けると、エディは立ち上がった。

「じゃあ、そろそろおれたちは行くから。宿を探さないといけないしな」

「あっ、それなら」

とティナ。

「よかったら、セシリア様のお家へいらっしやいませんか。小さい

所だけど、三人泊まる余裕はあると思います。あたしを助けてくれたお礼に」

「本当か！」

カムイが眼を輝かせて言った。

「ベッドはないので、布を敷いて寝てもらうことになるんですけど……」

「それはもう全然！ 泊めてくれるだけで！」

「良かった。セシリア様も歓迎すると思います」

カムイはエディの肘をつついた。

「いたぜ。ただで泊めてくれる親切な人」

「……………」

大都市であるメルカーレも、市街地から少し離れば緑が多く見受けられる。

セシリアのいるという家は、森と言ってもいいほど緑に囲まれた場所だった。

「どうぞ、入ってください。セシリア様も中にいらっしやいますから」

ティナに招かれ、エディたちは家に足を踏み入れた。

確かに家は狭いが、きちんと掃除されていて、隅々と綺麗な印象を受ける。

「部屋数がないので、ノエルさんはあたしと一緒にの部屋でもいいですか？」

「もちろん」

ティナは部屋を案内すると、三人を連れて家の一番奥にある部屋へ向かった。そこがセシリアの部屋らしい。

「セシリア様、ティナです。ただいま帰りました！」

すると、扉の奥から声が聞こえた。

「どうぞ、お入りください」

ティナが扉を開け、三人はその後に続いて部屋に入る。

部屋の中には、扉に背を向けるかたちで女性が一人椅子に座っていた。

女性は立ち上がり、来訪者たちに向き直る。

「ようこそ。歓迎いたします」

美しい女性だった。

「おお！ お美しい！」

と言ったカムイの足をエディが踏む。

しかし、カムイの感嘆も無理はない。

雪のように白い肌を取り巻いているのは、滝のように流れ落ちる漆黒の髪だ。腰の辺りまで伸びたその髪は、窓から吹き込む風を受けてさらさらと揺れている。

すっきりと整った目鼻立ちのセシリアは、どこか儂げな美女といった印象だ。

美しい瞳を持っているに違いないが、双眸は閉じられ、長い睫まつげが影を落としている。

「セシリア様、街でこの方たちに助けて頂いて……泊まる場所を探しているということなので、お連れしました」

セシリアはエディたちに頭を下げた。

「ティナを助けて下さり、ありがとうございます。私はセシリア。あなた方のお名前は？」

柔らかく響く、優しい声だ。

「エディさん、ノエルさん、カムイさんです」

「そう……どうぞ、ごゆっくりなさってください」

セシリアは眼を閉じたまま三人を順に見た後、ゆっくりとエディに歩み寄った。

「エディ様——ですね。申し訳ありませんが、後でこの部屋に来て頂けますか。お話ししたいことがあるのです」

エディは頷いた。

「……わかりました」

「おい、エディ！　ずるいぞお前だけ！」

案内された部屋に戻った後、カムイはエディに散々文句を言った。
「あんな美人に呼ばれるなんてよ。美形ってのは得だなあ」

「お前が想像してるのとは違うと思うぞ」

エディはどこまでも落ち着いている。

カムイは口をとがらせた。

「それにしたって、羨ましいもんは羨ましいんだよ！」

その時、部屋の扉がノックされた。

「お二人共！　夕食の準備ができましたよ！」

ティナだった。

「ほーい。今行きまーす」

カムイはそう言って部屋を出て行こうとしたが、エディは動こうとしない。

「どうした？　早く行こうぜ」

「先に行っててくれ」

「？　わかったよ」

不思議に思いつつも、カムイは部屋を出た。

一人部屋に残ったエディは虚空を見つめ、小さく呟いた。

「セシリアか……あの感じ……」

第四章 運命の導者（3）

夕食を食べ終えた後、エディは約束通りセシリアの部屋へ向かった。

セシリアは自室で食事を摂っているらしく、夕食の場には姿を現さなかった。

木製の扉を叩くと、先程訪れた時と同じようにセシリアの声が部屋の中から聞こえてきた。

「どうぞ」

部屋に入ると、やはり先程と同じくセシリアは椅子に座っていた。

「こちらへ。お掛けください」

セシリアは彼女の前に置いてある椅子に座るよう促した。

その通りに、エディは椅子に腰掛ける。

辺りはすっかり暗くなっているが、ランプに光が灯されていて煌々と室内を照らしている。

ランプの炎に照らし出されたセシリアの白い顔が闇を取り巻くかのように浮かび上がり、神秘的な雰囲気醸し出していた。

「エディ様——いえ、エドワード・クライス様」

決して大きくはないのによく通る声だ。

エディは特に驚いた様子も見せない。

「なぜ、おれの名を？ 予知能力で知ったんですか」
セシリアは首を振る。

「以前、お会いしたことがあるのです。あなたと同じ金色の瞳こんじきを持つお方に」

「！」

この女性も、マーリンを知っている——。

「マーリンと会ったことがあるんですか」

セシリアは頷いた。

「私は目の前のものを見る眼を失った代わりに、遠くの未来を見通す眼を得ました。あのお方にお会いした時に、未来を見たのです。あのお方の傍に、エドワード・クライスと名付けられた太陽の如き光の化身を……」

「……………」

「あのお方とあなたが出会ったのは運命の導き。そして今日、私があなたと会ったのも運命なのです」

「おれがここに来ることを知っていたんですね」

「あなたほどの強い光を見逃すはずがありません」

そしてセシリアはゆっくりと眼を開けた。

光を失っているはずの灰色の瞳が真っ直ぐにエディを見据える。

「私は運命の導者。未来を導くために存在する者。エドワード・クライス——大いなる力を背負いし光の御子よ。あなたはこれから先、多くのものを得、また失うでしょう。しかしあなたは進み続ける。己の願いを叶えるために」

エディの金色の瞳がセシリアを真っ直ぐに捉えている。

「おれの願いはマーリンと会うこと、それだけだ。運命なんてものは関係ない」

「あのお方との再会を求めることこそ、宿命の道」

「……………どういうことだ」

窓から強い風が吹き込み、ランプの炎が揺れた。

「あなたが己の望みを叶えるため、道を進むならば——あなたははずれ、赤き悪魔と対峙することになる」

「赤き悪魔——？」

「それを宿した者は、永遠と強大な力を得ると伝えられています。様々な呼び名がありますが、文献などでは主に『エリクシル』と呼ばれています」

エリクシル——。

命に永遠を、老いた体に瑞々しい若さを、死者に生を与えると
言う、伝説の霊薬。

お伽話の中ではクロートス王国が滅んだ原因とされている。

「数百年前、あなたの祖先は朽ちぬ命を得るためエリクシルを欲
しました。そして、エリクシルの魅力に取りつかれた多くの人間がエ
リクシルを求めて争い、多くの血が流れました」

「……………」

「エリクシルは実在し、国を一つ滅ぼしました。現在はお伽話とし
て伝えられています。あれは本当にあった出来事なのです」

これを聞いたのが他の人間であれば「そんなことは有り得ない」
と言うか笑い飛ばしただろうが、エディは驚かなかった。無表情の
まま、セシリアを見ていた。

「エリクシルは本来なら存在してはいけないものなのです。あれは、
宿主の望むものを与える代わりに心を蝕みます。エリクシルを宿し
た者はエリクシルを奪われることを恐れ、他人を信じられなくなる。
クロートスでのエリクシルを巡る争乱は、滅びたはずの王家の血を
引く一人の魔道士が収めました。それから数百年に渡り、エリクシ
ルは歴史の闇に葬られたかのように思われていました。しかし――」
セシリアはゆっくりと言葉を紡いだ。

「再びエリクシルを欲する者たちが現れたのです」

「……………」

「エリクシルは消え去ったわけではありません。クロートスの惨劇
が繰り返されようとしています」

エディは口の端だけで笑った。

「おれに、その争いを収めろって言うのか？」

「いいえ。しかし、あなたがいくら戦乱から逃れようとしても、赤
き悪魔はあなたを逃しはしないでしょう」

「おれがエリクシルを巡る戦いに巻き込まれるのは『運命』だって
言いたいのか？」

セシリアは答えなかった。

しばしの沈黙が流れ、やがてエディが口を開く。

「おれは、世界がどうあろうとおれのしたいようにする。おれは大義のために戦えるような人間じゃない。いつも、自分自身のためだけに戦ってきた」

「……………」

「これからそれは変わらない。おれの目的を邪魔する奴は倒す。それだけだ」

金色の双眸には揺らぐことのない強い意志の光が宿っている。

「お聞きしたいことがあります。あのお方に会って——その後はどうするおつもりですか」

エディは肩をすくめた。

「さあな。あまり後のことは考えてない。——それなりに近くにいられば、それでいいよ」

「……………」

「おれからも、聞きたいことがある」

「何でしょう」

少し間を置いてから、エディは切り出した。

「あんたは昔から歳を取っていないそうだが——エリクシルと関係があるのか？」

セシリアはおもむろに口を開いた。

「私がエリクシルを宿しているかという意味ならば、そうではありません」

「だったら、もう一つ聞いていいか」

「はい」

「あんたとよく似た気配を持つ人間を知ってる。そいつも、おれの知る限り歳を取っていなかった」

「……………」

今まで全く表情を変えなかったセシリアの表情がかすかに動く。

エディはその表情の変化を見逃さなかった。

「……知ってるんだな」

セシリアは再び眼を閉じた。

「私は既に世俗から離れた身。私と関わっている者は、現在ではテイナただ一人です」

「――そうか」

エディは立ち上がり、セシリアに背を向けた。

「そろそろ戻ってもいいか」

「ええ。お呼び立てして申し訳ありませんでした」

ドアノブに手を掛け部屋を出ようとしたエディの背中に、セシリアの声がかかった。

「エドワード様。信じるべきものは、己だけではありません」

「……………」

エディは答えず、そのまま部屋を出た。

第四章 運命の導者（4）

「ノエルさん、もう寝ました？」

「ううん、起きてる」

ティナの部屋で、ノエルは眠れないままベッドに横たわっていた。ベッドの横の床に寝ているティナが身を起こした。

ノエルも慌てて起きる。

「やっぱりベッドで寝る？」

暗闇の中で、ティナが激しく首を振るのが見えた。

「いえいえ！ お客様を床に寝せるわけにはいきませんから！」

最初はノエルが床で寝ようとしたのだが、ティナが断固拒否したのだ。

「でも……やっぱり悪いわよ。私ならどこでも寝れるから」

「あたしだってどこでも寝れます！ それにノエルさんは旅で疲れてるんだから、ちゃんとベッドで寝ないとだめですよ」

ノエルは少し笑った。明るく活発なティナを見ると、元気を分けられているような気がする。

「……あの、ノエルさん」

「うん？」

「ノエルさんたちは、どうして旅をしているんですか？」

ノエルはすぐには答えられなかった。事情を全て話すわけにもいかない。慎重に言葉を選びながら答えた。

「私は……エディにくつついているだけなの」

言ってから、少し言い方がまずかったかもしれないと思った。

しかし、これは事実である。ノエルは博士の死の理由をマーリンに聞かため、エディと行動を共にしているに過ぎないのだ。

「……エディさんとノエルさんは恋人同士なんですか？」

ティナはノエルの言葉をそのままの意味に取ったらしい。

ノエルは慌てて否定した。

「そ、そうじゃないの。その……なんて言うか……エディは人探しをしていて、私もその人に会いたいから、一緒に旅をしているだけ」「本当に？」

「本当よ。だって、私とエディは会って間もないし……」

初めて会った日から一週間と少し程度だろうか。思い返してみると、あまりに多くのことがありすぎて、随分長い時間が流れたような気がする。

「ノエルさんはエディさんのことどう思ってるんですか？」

「どうって……何とも思っていないけど」

「怪しいなあ」

暗いのでティナの表情はわからないが、にやにやと笑っているに違いない。

「エディさんて——こういう言い方、男の人には失礼かもしれないけど——本当に綺麗ですよねえ。あたし、あんな綺麗な人初めて見ました」

「うん……私もそう思う」

鮮やかな赤い髪。太陽のような黄金の瞳。誰もが見惚れるに違いない。

そして何よりも、あの強烈に人を惹き付ける空気はどこから来るのだろう。

「あんな人とずっと一緒にいたら、好きになっても仕方ないと思いますよ」

からかうような口調でティナは言う。

「私はそんなこと思ってないってば」

「カムイさんもかっこいいんですけどね。エディさんとはまた違った感じで。精悍っていうのかな？」

「……………」

「ふふ、羨ましいなあ、ノエルさん」

ノエルは思わずため息をついた。

「あのね、私は全然そういうことには興味がないの」

「ええっ？ もったいない」

「それに……カムイはともかく、エディは……絶対に振り向いてくれないと思う」

言葉の意味がわからなかったようで、ティナは無言でその先を促した。

「例えば——例えばの話よ。私がエディのことを好きだとしても、エディはその気持ちには答えてくれない。そんな気がする」

「どうして？ エディさんだって誰かを好きにはなるでしょう？」
心底不思議そうにティナは尋ねる。

それもそうだ。他人を好きになるというのは、人として当然の感情なのだから。

「私、エディのことをほとんど知らないけど……エディはいつも私たちの一歩先を歩いて、私はエディの背中しか見ていなかった。常に道の先を——前を見つめている感じで……後ろから呼んでも、振り向いてはくれないと思う」

「……………」

エディは目的を果たすため——マーリンに会うために旅を続けている。

博士が殺されたあの夜、エディはノエルを守ると言ってくれたが、彼にとっては危険な旅に同行させることへの『責任』でしかないのだ。

ティナは大きく息を吐いた。

「そっかあ……でもまあ、確かにそんな感じはしますよね。ちょっと近寄りがたい雰囲気だし」

「そういうこと。——はい、この話はもう終わり。早く寝ましょ」

「はい」

ティナが横になったのを確認してノエルも再び上体を横たえ、ぼんやりと天井を見上げた。

同世代の女の子と話したのは本当に久しぶりだ。やはり、このく
らいの年頃の女の子はこういう話に興味があるものなのだろうか。

確かに博士の助手になる前、まだ叔父夫婦の家で普通に生活して
いた時、町の女の子たちはどこの誰が格好いいだとか、告白したい
だとか色々騒いでいた。

女友達から好きな人はいないのかと聞かれたこともあったが、そ
の度「そういうことにはあまり興味がないから」とかわしてきた。
事実、あまり男の子と話すこともなかったし、好きになる機会もな
かったのだ。

（そういえば私、恋とかしたことないな……）

したいとも思わないが、十七にもなってそういう感情を持ったこ
とがないというのも、いかななものか。カムイが聞いたら目を真ん
丸にして驚くだろう。

（ううん、そんなことに気を逸らしてる場合じゃないもの！）

そして無理矢理目を閉じ、眠りについた。

第四章 運命の導者(5)

翌朝、エディたちは朝食を摂った後、再び北へ向けて出発するこ
ととなった。

朝日に輝く木々に囲まれる小さな家の前で、エディたち三人と見
送りに来てくれたセシリア、ティナの二人は向かい合っていた。

「お世話になりました。ありがとうございます」

ノエルは深く頭を下げ、ティナとセシリアにお礼を言った。横に
いるエディとカムイも同じようにお礼の言葉を述べる。

「世話になったな」

「ほんと、助かったぜ」

ティナが笑顔で答える。

「あたしも楽しかったです。またいつでも来てください」

カムイは白い歯を見せて笑った。

「またお邪魔するよ。飯もうまかったしな」

「お前は食いすぎだ」

すかさずエディが言う。昨夜と今朝の食事もカムイは優に三人前
は食べていたのだ。

「とにかく、ありがとう。お礼もできなくて悪いけど……」

ノエルが言うと、ティナはぶんぶんと首を振った。

「いえっ、そんなのは全然！　というか、元々あたしが助けてもら
ったんだし……充分すぎるくらいです」

ノエルはティナに笑いかけた。

「お兄さんたちとしっかり話し合ってね」

ティナは頷いた。晴れやかな笑顔だった。

「はい。セシリア様もその方がいいと言ってくれました」

「ノエル様」

セシリアが一步前に歩み出た。陽の光を受けて艶やかに輝く黒髪が美しい。

「ティナのこと、本当にありがとうございました。ティナの家族が彼女を心配するのは当然です。私が直接出向いてお話をすべきなのですが……」

ノエルは慌てて首を振った。

「そんな……私は思ったことを言っただけですから」

セシリアは美しい微笑を浮かべた。

「あなたの強さはその優しさ……他者を深く思いやる、強く優しい心。その心を忘れずにいれば、あなたは光を見失うことはないでしょう」

「……？」

「そろそろ行こう」

エディが言った。

「うん。——ティナ、セシリアさん。またお会いしましょう」

「はいっ！ 待ってます！」

エディたちが去った後も、ティナとセシリアはしばらくその場で彼らの背中を見送っていた。

「……行っちゃいましたね」

「彼らが定められた道を進むのであれば、また会うこととなるでしょう」

セシリアは天を仰いだ。木々の間から黄金の太陽が見える。

「あらゆる神々のご加護が彼らの上にあるように」

「さて。次の目的地は——と」

歩きながらカムイが言い、懷から地図を取り出した。

「このまま真っ直ぐ北に行くと、レヌって村がある。レヌのすぐ傍には、王国の東西を横断するフェルシュ河が流れてる。北へ行くに

はフェルシュ河を渡らなきゃいけないぜ」

「船で渡るのよね？」

「まさか泳いで渡るわけにはいかねえよ。レヌから船が出てる。ま、ここからレヌまでは結構歩かなきゃいけないけどな」

「詳しいのね」

ノエルは感心して言った。

「色んなところを渡り歩いてるからな」

カムイは得意気に言った後、腕組みをした。

「しっかしなあ。歩きでゼスタ地方まで行くとなると、どれだけ時間がかかることやら」

「どれだけ時間がかかろうと、前に進むだけだ」

一歩先を歩くエディが言った。そして小さく後ろを振り返る。

「嫌なら抜けてもいいぞ。おれは自分の身は自分で守れる」

「嫌だなんてとんでもねえ。渋るお前に無理矢理くっついてきたんだ。最後まで付き合わせてもらうぜ」

エディは不思議に思った。

この青年が自分の旅に付いて来るのは何の為なのだろう。本当に、エディたちの身を守るためだけに同行しているとは思えなかった。

「お前、何の為に俺たちについて来てるんだ？」

率直に尋ねてみると、カムイはきょとんとした表情になった。

「何の為に……一応、護衛のつもりなんだけど。マーリンにも会いたいしよ」

「本当にそれだけか？」

カムイは顔をしかめた。

「俺を疑ってるわけ？」

「そういうわけじゃない。純粹に疑問に思ったただけだ」
するとカムイは目を丸くした。

「へえ、お前がそういうことを言うなんて珍しいなあ。俺に興味持った？」

「違う」

するとカムイはにやにや笑いながらエディに近付き、肩を抱いた。
「隠すなって。本当は俺のこともっと知りたいと思ってんだろ？」
「……やっぱり何も答えないでいい。面倒くさくなってきた」
「そりゃねえよ。せっかくもつと仲良くなれるいい機会だと思ったのに」

「仲良くななくていい」
「冷てえなあ」

大柄な青年が細身の少年にすり寄っては冷たくあしらわれるという光景は中々奇妙なものだった。

エディは背後で笑うノエルに気付き、
「おい、何笑ってるんだよ」

と不機嫌そうに言った。

「だって、おもしろいんだもの」
カムイは大きく頷く。

「笑うのはいいことだ」

「ふざけてないで、さっさと行くぞ」

エディはまわりつくカムイを振り払い、足を速めた。

第五章 夜闇の罠（1）

ランプの炎が赤々と燃え、薄い闇に包まれた広い部屋にわずかな光を灯している。

とある町の旅館の一室であつた。町の宿の中では最も大きいこの旅館の中でも高級なこの部屋には、壁やら天井やらに豪華な装飾が施されている。

そんな部屋に置かれている、豪華なベッドで眠る人影が一つあつた。

ベッドに寝ているのは若い女だ。服の類は何も纏わず、官能的な体を横たえている。

その時、部屋の窓ががたり、と音を立てた。

閉じられていた瞳が開き、女はむくりと起き上がる。

妖艶な雰囲気漂わせる美しい女だ。長い黒髪が波打って流れ落ち、白い肌を取り巻いている。拔群の曲線を描いた体は酷く艶かしなまめかった。

「ちよつと待って頂戴」

女は何もない空間に向かって話しかけた。

ベッドの脇に置いてあつた服を着ると、女はベッドに腰掛け、豊かな黒髪をかきあげた。

「何かしら」

女の黒々とした瞳が闇を見つめる。

闇に紛れ、部屋の中にいつの間にかもう一つの人影が現れていた。窓にもドアにも開けた形跡はない。

どんな方法を使ったのか、突如部屋の中に出現したのである。

「新たな指令が下った」

若い男の声だった。男は黒いローブに身を包み、顔を見られるのを避けるかのようにフードを目深に被っている。

「エドワード・クライスを追え」

女の赤い唇が笑みの形を作った。

「ふうん……あの子、まだ逃げ延びているのね。そんなに育て親が恋しいのかしら」

女は流れるような動作で長い脚を組む。

「健気なものね。我が子を捨てた薄情な親を追いかけるなんて」

「今、エドワードは三人組で動いている」

男が何の感情も伺えない声で言った。

「一人はノエル・ブライト。ダルトンの助手だった少女。もう一人は——名は不明だが、灰色の髪に褐色の肌の大柄な若い男」

「あら、そんなに仲間がいるのね。ダルトンの助手と一緒にいることは知っていたけれど……無関係な第三者も巻き込むなんて、悪い子」

女の口調はどこか楽しげだ。

「——すぐに後を追うわ。彼らは今どこにいるの？」

「メルカーレだ」

「すぐそこね。エディを追って、マーリンの居場所を確認すればいいんでしょう。何てことないわ」

女が立ち上がると、男が何の色もない声で言った。

「『気を付けろ』——シモンの伝言だ」

すると、女は艶麗な笑みを浮かべた。

「『心配はいらない』と伝えて。——私は従うわ。シモンの意志なら、ね」

第五章 夜闇の罠(2)

星が輝く夜空のもと、焚火が勢いよく燃えている。

エディ、ノエル、カムイの三人はメルカーレからレヌへ続く街道から逸れた林の中にいた。

セシリアの家を出た後、レヌに向けて歩く一行は歩き続けて疲労がたまった体を休めているのだ。

エディとカムイは夜通しでも歩き続けることはできるが、普通の少女であるノエルはそういうわけにはいかない。むしろ、あまり休息を取らず一日中歩き続ける体力があるだけ驚くべきことなのだ。

しかしノエルは、ろくに足を動かすこともままなくなってしまうた自分を情けなく思っていた。

「ごめんなさい……私、足引っ張ってるよね」

目を伏せてそう言うと、火の世話をしていたカムイが笑顔で首を振った。

「そんなことねえよ。俺もエディもかなり疲れてるし。むしろ、よくここまで歩けたよな」

「でも、昼間だって私のために休んだし……」

「ノエル」

ノエルの横にいるエディがふと言った。

「そんなに急ぐ必要はない。今だって確実に進んでいるんだから、それでいいじゃないか」

「でも、エディだって早くマーリンに会いたいでしょう？」

「無理して体を壊したら元も子もないだろ」

エディは焚火の傍に座りなおした。端正な顔が明るく照らし出される。

「おれだって人間だからな。ちゃんと食って寝なきゃ死ぬ」

エディの笑顔がノエルの心に深く刺さった。

「……ごめんね」

少し気を緩めると、涙が溢れてしまいそうだ。

自分の都合でエディに付いて来て、ろくに助けにもなれず、かえって足手まといになっている。

すると、エディは困ったように笑った。

「何で謝るんだよ」

「だって……」

「そんなこと言ってる暇があったら、明日に備えて早く寝た方がいい」

「……うん」

ノエルが横になろうとしたその時だ。

エディとカムイがばつと顔を上げた。

「どうしたの？」

二人は立ち上がり、周囲を伺うように視線を動かした。

カムイが自然な動作で腰の剣を抜く。

長剣を抜き払ったカムイの表情は見た事がないほど引き締まっている。己の腕一つで生きてきた戦士の姿だった。

「……追手か」

エディが低く言った。彼の黄金の瞳も鋭い輝きを放っている。

この場に近付いてくる殺気立った気配が、二人の感覚に触れたのだ。

「かなりの数だな。十か……二十か」

「ノエル、おれの傍から離れるな」

緊張に身を凍らせながらも、ノエルは立ち上がり、エディの傍に行った。

やがて、草をかき分ける足音がノエルの耳にも捉えられるまで、近くなった。

「これは——騎士団じゃないな」

エディが言う。

「足音が酷くばらけてるし……ランスロットがいない」

「気配だけでわかるくらい仲良しなのかよ？」

「あいつが持つてる魔法剣の魔力を感じないって意味だ」

はつきりと眼で確認できるほどの距離に、三人を囲うように曲者たちが現れた。

エディの言う通り、騎士ではなかった。

数は十五人程度だろうか。それぞれが長剣を携え、エディたちに向けている。

全員布で鼻から下を覆い、顔を隠しているが装束はそれぞればらばらだ。特に具足の類は身に着けておらず、比較的軽装に見える。

「こんなところに山賊か？」

「賞金稼ぎだろ。一応、おれには賞金がかかってるからな」

エディが右手をかざす。頭上に掲げられた右手が光を放ち始めた。

「おい、待て！」

魔法を使おうとしたエディをカムイが止めた。

「ここで派手な魔法を使ったら、騎士団に居場所を知らせるようなもんだろ」

エディはカムイを睨んだ。

「じゃあどうするんだよ。これだけの人数を振り切れるとは思えないぞ」

するとカムイは不敵に笑った。

「こういう時のために俺がいるんだろ？」

曲者たちが一斉に襲い掛かってきた。

カムイは向かっていくつもの刃を大柄な体からは想像もできないような俊敏な動きでかわし、次々と曲者たちを斬り払う。

「ぐあっ！」

「ぎゃあっ！」

激しい剣戟の音と悲鳴が静寂を切り裂く。

エディも光の剣を出現させて応戦した。

襲い掛かってくる曲者たちの剣を叩き落とし、急所を斬る。

「へえ、剣も結構使えるんだな！」

敵を倒しながらカムイが言った。

「あんまり話しかけるな！ お前と違って余裕はないんだ！」

「悪い悪い！」

ノエルを庇っているエディには余裕がない。かなりの数の敵を倒してはいるが、何せ敵の数が多いのだ。

それでも、二人の強力な戦士に曲者たちは次第に押されつつあった。

状況を不利と見たか、突然、曲者の一人が焚火に向かって手をかざした。

その手には、青色に輝く石が握られている。

それを見たノエルは瞬時に理解した。

「水の魔石！ 火を……」

男が握っている魔石から、水が溢れ出る。

魔力によって創造された水は、まるで生き物のように宙を舞い、焚火の上に覆いかぶさった。

唯一の光源であった炎が消え、その場は完全な闇に閉ざされる。

「ちっ！」

一瞬のうちに曲者たちが退いていくのがわかった。

何事もなかったかのような静寂が再びこの場を支配する。

エディは左手に光球を出現させ、闇を照らした。

曲者たちの姿はどこにもない。

「逃げやがったか」

剣を鞘に収めながらカムイが言う。

「とりあえず、やられなくて良かったな」

しかし、エディは強張った顔で辺りを見回している。

カムイも異変に気付いた。

「まさか——！」

ノエルの姿がなかった。

気配も感じない。

「ノエル！」

返事はない。声は空しく闇の中に吸い込まれていった。

「まさか、あいつらに！」

エディは痛烈に舌打ちをした。

火が消されて、隙ができた時にノエルは曲者たちに連れ去られたのだ。

「畜生……！」

金色の瞳が怒りに燃えて爛々と輝いている。

少年の体から発せられる壮絶な気に慄くかのように、木々が揺れた。

エディは拳をきつく握りしめた。

「何をしてたんだ、おれは……！」

「とりあえず落ち着けよ」

カムイが冷静に言った。

「あいつらが逃げた場所がわからないじゃ、どうしようもない。

ノエル、魔法具を持ってただろ？　その魔力を追うことはできないのか」

エディは首を振った。

「だめだ。あの指輪じゃ魔力が弱すぎて、離れたら感知できない」

カムイは腕を組んで考え込んだ。

「どうしたもんかな……」

重い沈黙が流れる。

エディはひたすら自分を責めていた。

守ると言ったのに――ノエルもその言葉を信じて自分を頼りにしてくれていたのに、この有り様だ。

あの賊たちの狙いはエディだった。ノエルはエディをおびき寄せるための餌として、連中にさらわれたのだ。

自分のせいで、ノエルにこんな目を合わせてしまった。

（無事でいてくれ……！）

その時だった。

「女の子一人守れないなんて、しょうのない子」
夜陰から、艶のある女の声が響いた。

「誰だ！」

カムイが剣の柄に手を掛ける。

がさりと草を踏む音がして、一人の女が姿を現した。

二十代半ば程度に見える、若い女だ。白く滑らかな肌とそれを取り巻く艶やかな漆黒の髪が、絶妙な色の対比を描いている。黒々とした切れ長の瞳や赤い唇が印象的で、『妖艶』という言葉がしっくりとくるような美女だった。

全く気配を感じせずに近付いて来たその女の顔を、エディは知っていた。

「ディアナ……！」

「久しぶりね、エディ。相変わらず可愛いこと」

ディアナは謎めいた微笑を浮かべている。

第五章 夜闇の罠(3)

ディアナは十年近く前、どこからかシモンが連れて来た少女だった。

それからは組織以内で主に諜報の仕事を受け持つようになった。ディアナはあちこちに出掛けていたので、エディは彼女とあまり関わったことはないが、本部にいる時は常にシモンの傍にいたような気がする。

「おれたちの跡をつけていたのか？」

ディアナの赤い唇は、優雅な微笑を湛えている。

エディは内心ではかなり驚いていた。

つけられている気配など、微塵も感じなかったのだ。

「そうよ。こっそりつけるつもりだったんだけど……そうもいかなくなったわね」

「どういうことだ？」

「わからないの？」

からかうようなディアナの口調だ。

「あなたの大切な女の子がさらわれたのよ。助けないわけにはいかないでしょう？」

「……………」

「協力すると言っているの」

「お前に手を貸してもらう必要はない」

きっぱりとそう言うと、ディアナはくすくすと笑った。

「よく言うわね。あの子をさらった連中が誰かもわからないくせに」
「……………」

「彼らはこの界限ではそこそこの名知られた賞金稼ぎの集団よ。ア

ジトはここから北西へ行ったところにある廃村。そう遠くはないわ」
「何が目的だ？」

低く響く声でエディは聞いた。

「おれたちにこんなことを教えて、何のつもりなんだ？」

「ただの親切心よ」

「適当なことを言うな」

エディの声が凄みを帯びる。

「おれを連れ戻しに来たんじゃないのか。なぜそうしない？」

ディアナは微笑を浮かべるだけで答えない。

「本当はあなたが捕まっても捕まらなくても、あまり関係ないけれど。ただ、せっかくやり応えのある仕事を与えられたのに、こんなにすぐ終わってしまっではつまらないのよ」

「……………」

ディアナは楽しげに笑っている。

「シモンはあなたに会いたがっているでしょうね。半年も姿を見ていないんだもの」

「戻るつもりはない」

「いいこと？ エディ」

言い聞かせるようにディアナは言った。

「あなたは私たちの手から逃れたつもりでいるんでしょうけど、それは思い違いよ。ただ少し遊ばせているだけ。その気になればいつでも連れ戻すことはできるの」

「……………」

「そうしない理由は——わかっているわね？」

ディアナは背を向けた。

「とにかく頑張って頂戴。囚われのお姫様があなたの助けを待っているわよ」

そう言ってディアナは夜の闇に姿を消した。

残された二人はしばらくそのまま佇んでいたが、やがてカムイが口を開いた。

「今のは……ウロボロスの？」

エディは頷く。

「どうするんだ」

「――行ってみよう」

「信じるのかよ？」

「闇雲にノエルの居場所を探すよりましだ」

カムイは灰色の頭をかきむしった。

「それはそうかもしれないけどよ……あいつが嘘をついてねえって証拠は？」

「ない。けど、とりあえず信じてみるしかない」

エディの瞳は真っ直ぐに前を見つめていた。

第五章 夜闇の罠（4）

黴臭^{かび}い部屋に、ノエルは閉じ込められていた。

手足を縄で拘束されているのでろくに身動きがとれず、更に目隠しまでされているので、どのような場所にいるのかもわからない。壁一枚隔てた部屋から、複数の男の話し声が聞こえる。

「しかし、あんなガキに百万もかけられてるとはなあ」

「確か、ウロボロスの関係者じゃなかったか」

「本当かよ」

「てめえも見ただろ？ あのカキ、普通じゃねえぜ。ろくに動けねえ仲間連れてたお陰で助かったけどよ」

「助けに来ると思うか？」

「お頭の勘に任せるしかねえだろ」

そして段々と声は遠ざかっていく。

今はまだ夜だろうか。独特の静けさが辺りに満ちている。

（エディは、もしかしたら来ないかもしれない……）

エディと行動を共にするようになってから、彼の役に立ったことがあっただろうか。

助けられているのはいつも自分だ。

最初に会った時、エディは自分を斬ろうとした刃から守ってくれた。その後、研究所を抜け出すときも。

今まであったことを思い返すと、涙が溢れそうになった。

彼の背に守られてきた自分の弱さに。そんな自分を守り続けてくれた彼の優しさに。

（私は、エディの足手まといになることしかできない……）

その時、扉が開かれて足音が入ってきた。

「大人しくしてゐてえだな」

野太い男の声だ。さっきの連中のリーダー格だろうか。

ノエルは見えない相手を睨んだ。

「私を捕まえたって無駄よ」

「ほう？」

男はおもしろそうに言った。

「エディは来ないもの」

「見捨てたってのか？」

「そうよ。こんな足手まといをわざわざ助けに来るはずないわ」

強い口調でそう言う。

しかし、男は楽しげに笑っている。

「とにかく、大人しくしてゐたな。あいつが来なかったら、好きにさせてもらうぜ」

「……………」

男は部屋から去って行った。

（私…………どうすれば…………）

これ以上、エディたちの荷物にはなりたくないのに。

涙は眼に被された布に吸い込まれていった。

第五章 夜闇の罠(5)

『ここより西、モルフ村』――。長年、雨風にさらされて朽ち果てた木の看板が、ひっそりと佇んでいる。

まだ陽も昇りきらぬ早朝、エディとカムイはディアナに伝えられた場所へ向かって歩いていった。

二人とも言葉はなく、ただひたすらに足を進めている。

その通りにしばらく進むと、それらしきものがぼんやりと見えてきた。

「あれか……」

エディとカムイは村に足を踏み入れた。

村――と言って良いのだろうか。

木造の家々がぼつぼつと建っているが、そのほとんどが崩れかかっている。ましなものでも壁に大穴が空いているのだ。

人の姿は全く見当たらない。

「こんなところにアジトなんてあるのかよ？」

カムイが困ったように言った。

確かに、賞金稼ぎたちの本拠地があるようには見えない。

「騙されたんじゃないかねえの？ あ綺麗な姉ちゃんに」

「いや――どうやら本当だったらしい」

エディは足を止めた。

前方から、複数の人影がこちらへ向かってくるのがわかる。

「お迎えだ」

顔は隠していないが、風体は昨夜の賊たちとそっくりだ。

「やっぱり来たな」

リーダー格らしき男が前に進み出た。

顔を無精髭で覆った中年の男だ。カムイを上回るほどの長身で、体つきもがっしりとしている。

「ノエル！」

その男の横に、縄でしばられたノエルがいた。

特に目立った怪我はしていないようだ。金色の髪は乱れ、顔も青ざめてはいるものの、目には生気がしっかりと宿っている。

エディが安堵の息をつくとき、男は楽しげに笑った。

「おっと、安心するのはまだ早いぜ。――俺はギリガン。てめえみてえなお尋ね者をとっ捕まえて、国家に貢献してるのさ」

そう言ってギリガンは手に持っていた短剣をノエルの首に突きつけた。

ノエルは歯を食いしばってギリガンを睨む。

「離してよ……！」

口調は強いものの、その声からは濃い疲労が伺える。

「できねえ相談だ」

ギリガンは下卑た笑みを浮かべた。

「赤い髪に金の眼。手配書の通りだぜ。確かにてめえがエドワード・クライスみてえだな」

「おれにかかっている賞金が目的か」

「そうだ。あのウロボロスの関係者らしいじゃねえか。よっぽど、国はてめえを捕まえたいと見える。――破格の賞金だぜ」

ギリガンは更に、手に握る短剣に力を込めた。鋭い切っ先が少女の白い喉に触れて、鮮血が滲む。

「お前を騎士団に引き渡しゃ、一気に大金が――」

「離せ」

エディの低い声が遮った。

「ああ？」

「離せ、と言ってる」

ギリガンは硬直した。

感じた事のない悪寒、恐怖――言葉では言い表せない気が全身に

突き刺さる。

ギリガンがそれがこの赤髪の少年から放たれるものだという事に気付くのに、数秒かった。

少し離れた場所に立っているのにも関わらず、少年の瞳の色がやけに輝いて見える。

あまりに強い金色の光が、ギリガンの両眼を射抜いた。まるで太陽を直視した時のような、瞳を焼かれるような感覚に襲われる。

「おれは怒ってるんだ。跡形もなく消されなくなったら、ノエルを離せ」

低く命じる声だった。

ギリガンの短剣を握る手が、無意識のうちに緩められた。

ノエルはギリガンの手から逃れ、エディのもとへ走った。

「エディ！」

ほとんど倒れ込むようにして、少年の腕の中へ飛び込む。

エディはノエルを拘束している縄に触れた。すると、エディの指先が触れたところから、まるで見えない炎に焼かれたように縄が焦げ落ちた。

「ノエル、大丈夫か」

「うん……ごめんなさい」

「だから、謝るなって」

ノエルはちよつと笑った。

「――ありがとう」

エディはノエルをカムイに預けると、一人前に歩み出た。

得体の知れない少年に恐れ慄いたのか、ギリガンとその部下たちは後ずさった。

エディの右手を光が取り巻く。

「火傷くらいで我慢してやる」

エディの右手から、ギリガンたちに向けて光が迸る。

凄まじい熱をまとった光は、逃げ惑う彼らを絡め捕った。足元を魔法の光に焼かれ、荒廃した村に男たちの悲鳴が響き渡る。

瞬く間に、十数人の男たちがその場に倒れ伏した。

「――怖いねえ」

沈黙を決め込んでいたカムイが漏らした。

エディは慚然と返す。

「ノエルをこんな目に合わせたんだ。それでも甘すぎるくらいだぞ」
「ま、確かに。無事で良かったぜ」

ノエルは少し笑った。

「……嬉しい」

「何が？」

「こんな足手まといを助けに来てくれたことが」
すると、エディは今度こそ呆れた表情になった。

「何言ってるんだよ。当たり前のことだろ。それよりも……」
エディは頭を下げた。

「ごめん。こんな危ない目に合わせて、本当に悪かった。――守る
って言ったのにな」

そう言ったエディに、ノエルは思わず目を丸くした。次第に頬が
紅潮してくるのがわかる。

「……どうした？」

「な、何でもない！」

その横でカムイがにやにやと笑っている。

「青春だなあ」

エディの金色の瞳が、ぎろりとカムイを見た。

「何言ってるんだ。――もうここにいない必要はない。さっさと行く
ぞ」

「あいよ」

一晩拘束されていたノエルを気遣いながら、ゆっくりと足を進め
て村を出た。

「今日はどこかで休もう。一応、野宿はやめておいた方がいいな」
ノエルは精神的にも肉体的にも疲労がたまっている。安心して眠
れる場所が必要だ。

「気を遣わせちゃって……ごめんなさい」

「あんな、ノエル」

エディは足を止め、ノエルの正面に向き直った。

「自分の存在が迷惑だとか、そういうことは思うな。おれもカムイも、そんなことはこれっぽっちも思っていない」

「そうそう！」

カムイが大きく頷きながら言った。

「自覚は無いかもしれないけどよ、ノエルの存在はすげえ大きいんだぜ？ なんつーか、貴重な癒し成分！ って感じ」

「——そういうことだから、謝るのは止めにしろ。もうお前の『ごめんなさい』は聞き飽きた」

ノエルは少しの間沈黙していたが、やがて笑顔で頷いた。

「——うん。ありがとう」

そして、三人が再び歩き出そうとした時だった。

木々の間から、何かが飛んできた。

それは矢だった。鋭い矢尻が、真っ直ぐに飛んできたのだ。

矢は空を裂き、ノエルに向かって走っていく。

「！ 危ない！」

鮮血が散った。

第五章 夜闇の罟(6)

以前夢に見た、あの日の光景。

懐かしい人と共にいる、幼い自分。

雪のように白く、月光のような輝きを持った髪。自分と同じ金色の瞳。

はつきりと眼に浮かぶ。

あの人が言った言葉が、頭の中に木霊していた。

『君の大切なものが傷付けられそうになった時——全身全霊をかけて守るんだ。一度失ってしまったら、もう二度と元には戻らないのだから』

何が起こったか、すぐには理解できなかった。

繁みの中から何かが飛んできた瞬間、ノエルはエディに突き飛ばされ、大きくよろめいてその場に倒れ込んだのだ。

矢がエディの左肩に深々と突き刺さっている。

矢が飛んでくる瞬間、エディはノエルを突き飛ばすようにして、彼女を庇ったのだ。

「……っ！」

エディの顔は苦痛に歪んでいる。

「エディ！」

ノエルは両膝をついてその場にうずくまるエディの横へしゃがんだ。

「血が……！」

エディの左肩から、赤い血がじわじわと染み出している。
エディは右手で己の肩に刺さっている矢を握った。

「だめだ、抜くな！」

カムイがエディの傍に駆け寄った。

「下手に抜くと、肉が裂けるぞ！」

「……油断した……みたいだな」

呻くようにエディは言った。

見ると、矢をつがえた騎士たちがエディたちを取り囲んでいる。
その中に一際鮮やかに翻る青い外套を認めると、エディは舌打ちした。

「魔法を使う余裕はなかったようだな」

ランスロットの青い瞳が三人を見下ろした。

「ちっ！」

カムイが剣の柄に手を掛ける。

「やめておけ」

ランスロットは眉一つ動かさずに言った。

「針鼠にされたくないければ、妙な真似はしないことだ」

カムイは猛獣のような眼で目の前の騎士を睨み、歯ぎしりした。

「畜生が……！」

カムイが毒づいたその時、エディがどさりと倒れた。

「おい、エディ！ 大丈夫か！」

「エディ！ しっかりして！」

意識はあるようだが、指先が細かく震えている。声も出せないようだった。

カムイはランスロットを凄まじい形相で睨んだ。

「毒矢か！ 卑怯なことしやがって！」

「心配する必要はない。ただの痺れ薬だ」

数名の騎士が歩み出て、地面に倒れたエディを抱いているノエルを無理矢理立ち上がらせた。

「離してよ！」

ノエルは身をよじって拘束を解こうとしたが、男の力に敵うはずもない。あつという間に縄を掛けられた。

カムイも同様に、剣を取り上げられ腕を拘束されている。

「てめえら……子供相手にここまでするのか。『桂冠の騎士』が聞いて呆れるぜ」

カムイの悪態にも、ランスロットは全く表情を動かさない。

「子供といえど、ウロボロスに関わった立派な罪人だ」

「それだけで、毒矢で射って無理矢理捕まえるのか」

その瞬間、若い騎士の表情がわずかに動いたのを、カムイは気付いただろうか。

「――必要ならば、当然の処置だ」

「勝手なこと言わないで！」

騎士たちに両手を縛られたノエルが叫んだ。水色の双眸には涙が溢れている。

「エディがウロボロスでどんなことをされたか……何の為に危険を冒して組織を抜けたか何も知らないくせに！」

思わず騎士たちが気圧されるほどの叫びだった。

「エディはただマーリンに……親に会いたただけなのに！　どうしてあなたたちに邪魔されなきゃいけないの！？」

「ノ……エル……」

倒れているエディがか細い声で言った。今までの彼からは想像もできない、弱々しく消え入りそうな声だった。

ゆっくりと、動かないはずの手を動かして体を起こす。

「ノエルに、触るな……」

呻くように、けれどはっきりと聞こえる声で、エディはそう言った。顔色は蒼白だが、眼だけが爛々と輝き、ノエルを拘束している騎士を睨む。

「馬鹿な……なぜ動ける！」

「触るなって、言ってるんだ……」

その時、誰もが見た。

少年を取り巻く金色の光を。

その場にいた誰もが、まるで太陽がそこにあるかのように眩しく、熱い感覚に襲われた。

「触るな！」

エディの声が大気を揺らす。

一陣の風が吹き抜けたかのように木々がざわめいた。

「ぐあっ！」

ノエルを拘束している騎士が、まるで見えない何かに突き飛ばされたかのように、大きく後ろへ吹っ飛んだ。

ランスロットが動く。

一瞬でエディとの間合いを詰め、頸部に手刀を落とす。

エディは声もなくその場に倒れ伏した。

「エディ！　しっかりして！」

ノエルの泣き叫ぶ声にも、エディは答えない。

「……連行しろ」

目の前に倒れている少年に戦慄を覚えながらも、ランスロットは低くそう命じた。

第六章 赤き悪魔の呪い（1）

「どうやら、上手くいったようですね」

エルフォード城の一室に、シモンとランスロットの姿があった。

「思ったよりも早く済んだ様子で、驚きました」

シモンはにっこりと笑いかける。しかし、ランスロットは笑う気にはなれなかった。

「なぜ、エドワードの居場所をご存知だったのですか」

ランスロットがエディの居場所を見付け出したのには理由がある。王都を出発する直前、シモンが「エドワードはメルカーレ付近にいる」との情報をもたらしたのだ。

「私の情報源が、彼の居場所を見出しただけのことです」

「……………」

シモンは微笑を浮かべているものの、相変わらず氷を思わせる冷たい空気をまとっている。

「これで、あなたの任務は終わりです。あのすばしっこい鼠を追い掛け回すのは骨が折れたでしょうが……………」

「シモン殿。あの少年は、本当にウロボロスに関わっていたのでしょうか」

シモンは少し不思議そうな顔をした。

「どういう意味です？」

ランスロットの心には、エディと共に捕らえられたあの少女の声が反響していた。

「関わっていた——と言うよりも、何等かの理由で組織に拘束されていたのでは……………」

すると、シモンは氷の刃のような笑みを浮かべた。冷たい感触が、

背筋を撫でたような感覚に襲われる。

「おかしいことを仰るのですね。エドワードはウロボロスの構成員であった。それが大前提のはずでしょう」

「その前提が間違っていたとしたら？」

「……………」

「あの少年には、何の罪もないのだとしたら……」

「誰に何を言われたのか存じませんが」

低く冷たい声でシモンは言った。

「あなたがそれを気にする必要はありません。あなたは己の任務を全うしたのです。後は私にお任せ下さい。――では、失礼」

そして悠然と部屋を出て行った。

「陛下、シモンでございます。ただ今参りました」

ここは数ある国王の私室の一つである。至る所に豪華な装飾を施されたこの部屋には、大きなベッドがあり、そこに国王オルテスが腰掛けていた。

今年で四十五歳になるオルテスは、二十五歳の即位より二十年間、名君として名を馳せて来た。

多くの民衆に慕われ、その手腕を如何なく発揮してきた国王は、常に威風堂々としており、まさに王の風格を漂わせている――そんな印象だった。

しかし、ベッドに腰を掛けている国王は心なしかやつれ、頭髪にも所々白いものが混じっている。

「シモン……………」

声にも力が無かった。

「エリクシルは、いつになれば手に入るのだ。私にはもう時間がない……………」

膝を握りしめている両手がかすかに震えている。

シモンは悠然とオルテスの元へ歩み寄り、片膝を付いた。

「もうしばらくご辛抱ください。明日の朝にも、エドワード・クライスの尋問を開始致します。そうすれば、エリクシルの在り処がわかりましょう」

「そのエドワードとやらは、本当にエリクシルの在り処を知っているのか」

シモンは微笑しながら頷いた。

「ご安心を。吐かせる方法はいくらでもあります」
すると、オルテスは力なく笑った。

「つくづく恐ろしい男だ……笑いながら、平気でそのようなことを口にする」

「子供を尋問するのは少々気が引けますが、陛下のお命には代えられません」

シモンは平然と言い放った。

「よく言う」

生気の衰えた双眸が鋭い光を宿した。

「まさに氷のような男だ……貴様のような男が、本気で私の命を案じているとは思えん。何を企んでいる？」

シモンは優雅な笑みを崩さない。

「何も、企みなどございません。全ては陛下の御身のため。陛下が永遠の命を授かれれば、この国は永劫の繁栄を約束されるでしょう」

「ふん……まあ良い。——一刻も早く、エリクシルの在り処を聞き出すのだ」

シモンは恭しく頭を下げた。

「御心のままに」

美しい満月が夜空を照らす。

冴え渡った銀光が闇に飲まれた世界に、淡い灯りを与えている。

ランスロットが自宅に戻った時は、既に夜も深まっていた。
王都エルフォードの中心部にあるアーヴィン家の屋敷は、一切の
光を失い、夜の闇と静寂に支配されている。

使用人たちも既に休み、起きているのはランスロットただ一人である。

暗い廊下をランスロットは歩いていった。

エドワードとその一行を拘束したのは数日前のことだ。今日の昼
にエルフォードに到着し、彼らは城の牢獄に投獄された。

（これで……良かったのだろうか）

あのノエルという少女の叫びが、未だに耳に強く残っていた。

——エディがウロボロスでどんなことをされたか、何の為に危険
を冒して組織を抜けたのか、何も知らないくせに——

なぜか、その言葉が延々と頭の中に反響している。

シモンは、あなたの気になるところではないと言った。

（何が正しくて、何が嘘なのか……私はどうすれば良い？）

ただひたすらに、自問自答するしかないかった。

ランスロットは自室の扉の前で立ち止まった。

ここ数日、ろくに眠っていないのだ。さすがに体も疲弊している。

鍵を鍵穴に差し、扉を開けた。

扉を開けた瞬間に、月光が漏れ出した。やけに室内が明るく感じ、
思わず目を細める。

「——！」

ランスロットは目を疑った。

扉と向かい合う壁にある窓の前に、人影があったのだ。

反射的に腰の剣に手を掛ける。

「何者だ！」

扉には鍵がかかっていた。窓から侵入するにしても、ここは三階
である。

「夜分に申し訳ございません」

静かな女の声が響いた。

夜なのに、眩しいほどに室内には月光が満ちている。

窓の前に夜空を背にして立っている女の姿も、はっきりと眼に見えた。

妙齡の美しい女性である。

闇に溶け込みそうな漆黒の髪が腰の辺りまで流れ落ち、閉じられている臉を縁取る長い睫毛は雪のように白い肌の上に影を落としている。

闇色の髪と、あまりにも白い肌の対比が、息を呑むほどに美しい。その女性は、前で両手を軽く握り、真っ直ぐにランスロットの方を向いていた。

「私はセシリアと申す者。どうか無礼をお許し下さい。あなた様にお伝えしたいことがあるのです」

第六章 赤き悪魔の呪い（2）

セシリアと名乗った美しい侵入者を見た瞬間、なぜかシモンを思い出した。

漆黒の髪に白い肌。

この超然とした雰囲気。

（似ている……）

目鼻立ちも、どこかあの氷の彫像のような美しい魔道士の面影がある。

しかし、あの男の刃のように鋭く冷たい雰囲気は、彼女にはなかった。

慈愛に満ちた聖母のようである。

ランスロットは剣から手を離れた。

「私に、伝えたいことだと？」

セシリアは頷く。

「先日、あなた様はエドワード・クライス様を捕らえられましたね。宮廷魔道士シモンの言葉に従って」

一瞬、ランスロットの表情が揺らぐ。

「それが、どうしたというのだ」

「シモンがどのような方法を使ってエドワード様の居場所を知ったか、ご存知ですか」

「いや。詳しくは、何も知らない」

ランスロットは素直に答えた。

シモンは情報源がたまたまエディの居場所を教えてくれただけだと言っていた。

「あなたは知っているのか」

「シモンは、部下にエドワード様をつけさせていたのです」

「部下？」

「あなたも薄々勘付いておられるのではないですか。シモンとウロボロスの繋がりを」

「――！」

ランスロットは食い入るように彼女の言葉を聞いていた。

「シモンはウロボロスの首領です」

驚愕と納得が半分ずつ、ランスロットの心を染める。

「シモンはエリクシルを手に入れるため――己の復讐を果たすために、ウロボロスを作ったのです」

「エリクシル？」

聞いた事のない言葉だった。

「それを宿した者に永遠の命を与えるという、伝説の霊薬です」

「……………」

あまりに突拍子もない言葉に、ランスロットは面食らったが、黙って聞いていた。

「クロートス王国のお伽話をご存知ですか？」

「大昔、内乱で滅んだという……………」

セシリアは頷く。

「その内乱の発端こそが、エリクシル。国王が不老の体を求めて家来たちに探させたと言う霊薬がエリクシルなのです」

「しかしそれは、お伽話なのでは……………」

「いいえ。今はお伽話として伝えられていますが、あれは本当にあった話です」

セシリアは更に続ける。

「エリクシルを宿した者は不老の体を得ます。しかし、消滅を知らないわけではありません。心臓を抉られるか、首を刎ねられるとエリクシルも体を再生できずに、宿主は死ぬと言います。――しかし、体が死んでもエリクシルは死にません。宿主の血となって流れ出し、その血を飲んだ者が新たな宿主となります」

「……………」

「エリクシルは宿主を不老にするだけでなく、強大な魔力をも授けます。——世界を滅ぼすことができるほどの」

「その力を求めてかつて多くの人間が争い、そして今度はシモン殿がそれを求めているというわけか」

「その通りです。——そして、このハイドニアの国王も」

「——どうことだ？」

ランスロットは身を乗り出して尋ねた。

「シモンが国王付きの魔道士となった理由はそこにあります。彼は国王にエリクシルの存在を告げ、エリクシルがあれば永遠を手にするだけでも唆したのでしょう」

セシリアの言葉に、ランスロットは大きく首を振った。

「そんな……まさか、陛下がそんな誘いに乗るはずが……」

「死に近付いた人間の心理とは、計り知れないものです」

セシリアの言葉は、ランスロットの上にならずしりとのしかかった。

「陛下が、死に近付いているだと……？」

「やはり、ご存知ないのですね。国王は不治の病に侵されているのです」

とても信じられなかった。

確かに最近、公の場に姿を見せることは少なくなってきた。しかし、以前姿を見た時は威厳に満ちた王者そのものであった。

もし病に侵されているというのなら、なぜ近しい臣下である自分に知らせてくれないのか。

「そのために……陛下はエリクシルを求められていると？」

あの賢王として知られた国王が、不老の夢に酔っている——？

そんな話を信じられるはずがない。信じたくもない。

しかし、目の前にいる美しい侵入者に嘘をついている様子はない。

「エリクシルは不老の命と魔力を与えるだけのものではありません」

「——？」

「エリクシルは宿主に力を与える代わりに、宿主の心を蝕みます。」

故に、クロートスであのような惨い争いが起きたのです」

セシリアの端正な顔に陰が差す。

「恐ろしい幻覚や幻聴に絶え間なく襲われ、他人を信じられなくなる。近しい人や家族でさえ、簡単に手をかけてしまうのです」

「……………」

「『赤き悪魔』——。かつてエリクシルはそうのように呼ばれていた。エリクシルを宿した者は、強大な力と朽ちぬ体の代償に、悪魔の呪いに苛まれます」

重い空気がその場を支配する。

「陛下は——そのようなものを求められているというのか」

「もしも国王がエリクシルを手に入れば、クロートスの惨劇が繰り返されるでしょう」

「エリクシルは——どこにある」

少し間を置いてから、セシリアは答えた。

「クロートスのお伽話は、滅亡した王家の血を引く一人の魔道士がエリクシルを封印したところで終わります」

「封印……………」

「厳密には封印とは違います。その魔道士は、エリクシルを自らの体に宿すことで、クロートスの動乱を収めたのです」

ランスロットは眉を寄せた。

それでは、何が変わったというのだろう。エリクシルを求めた多くの人間たちがエリクシルを宿していったのと変わらないではないか。

その疑問を見透かしたかのように、セシリアは続けた。

「魔力を受け付けられない普通の人間がエリクシルを宿せば、心を侵されます。しかしそれは、あくまで普通の人間に限った場合です」

「元から魔力を宿すクロートスの王族ならば、別だということか？」

セシリアは頷いた。

「その救国の魔道士こそ、現在のエリクシルの宿主であり、シモンに狙われている人物なのです」

ランスロットの脳裏に、赤い髪に黄金の瞳を持つ、あの少年の姿が浮かんだ。

「まさか、現在のエリクシルの宿主は……」

あの少年ならば——数百年前から生きていると言われても、あの不思議な少年ならば、信じられるような気がした。

しかし、セシリアは首を横に振った。

「エドワード様ではありません。彼は正真正銘、見た目通りの年齢です」

「では、誰が？」

「名はマーリン・アンブロジウス。——エドワード様を育てられたお方です」

第六章 赤き悪魔の呪い（3）

マーリン——聞いた事のある名だった。

エディたちを拘束した時、ノエルが言っていたのだ。

「そのマーリンを、ウロボロスは追っているのか？」

「ええ。マーリン様の宿すエリクシルを手にするために」

「……………」

ランスロットの考えは、一つの場所に行き着いた。

ウロボロスよりも先にマーリンを探し出し——エリクシルを奪う。

そして、エリクシルを破壊するのだ。

そうすれば、国王を偽りの夢から救い出すことができる。

しかしセシリアは、沈黙したランスロットの心の中を見透かしたかのように言った。

「マーリン様を殺めようなどとは思わないことです」

「……………」

「あなたにマーリン様を殺めることはできません」

「——なぜだ？」

低い声でそう言った。

セシリアは恐れる様子もなく、淡々と言葉を紡ぐ。

「あなた様を見くびっているわけではありません。あなた様の騎士としてのお力は、桂冠をその頭上に戴くにふさわしいものであると、充分承知しております」

「ならばなぜ止める」

「マーリン様はエドワード様を上回るほどの凄まじい魔力を操る魔道士です。それに加え、エリクシルの力も持っている。あなた様お一人で、あのお方の心臓を貫くことができますか」

「……………」

「仮にマーリン様を滅ぼすことができたとしても、エリクシルを破壊することはできません。マーリン様はエリクシルを破壊する方法を数百年——千年近くの間求められてきました。しかし未だに、その方法は掴められていないのです」

「千年近く……」

気の遠くなりそうな時間だ。

「エリクシルによる惨い争いを断ち切るため、マーリン様はエリクシルの呪いに耐えながらその方法を探していたのです」

「……………」

「ランスロット様」

セシリアは一步、ランスロットに近付いた。彼女が見せた初めての動きだった。

「己の心の声に、耳を澄ませてください。貫くべき信念と、信じるべき本当の正義とは何か、見定めるのです」

「……………」

「そして、選びなさい。シモンの傀儡と化した国王に忠義を捧げ続けるか、地位と栄誉を捨て、赤き悪魔と対峙するか」

セシリアはゆっくりと眼を開いた。

その銀色の瞳に、ランスロットは映っていない。映っているのは遙かな未来だ。

「己の信じるべきものを目指して進めば、自ずと道は作られています」

セシリアの双眸が、銀光を帯びる。

「……！」

次の瞬間、セシリアは姿を消した。

少しの動作も見せず、文字通り『消えた』のだ。

ランスロットは突如消えたセシリアの姿を探すでもなく、その場に立ち尽くした。

光が強くなるほどに、影も濃さを増す。

ハイドニア王国を照らす太陽の如く、燦然と輝く白亜の宮殿エルフォード城も同様だった。

堂々とそびえ立つ荘厳な宮殿のその背後には、王国の影そのものである牢獄があった。

エルフォード城を守護する結界の及ぶ最たる所である通称『暗黒の牢獄』。

真昼でも暗澹たる影に包まれているそこには、殺人などの重罪を犯した罪人たちが閉じ込められている。

牢獄の近辺には、城を守護する兵士たちでさえ近付かない。

長い間暗闇の中に閉じ込められれば、並みの人間では正気を保つのは難しい。

正気を失った罪人たちの怨嗟の声が、昼夜を問わず吹き荒れるのだ。

ノエルはそんな牢の中に幽閉されていた。

牢獄には酷く不釣り合いな少女の姿が不気味な闇の中に沈んでいる。

手足は拘束されていないが、冷たい格子には頑丈な鍵がかけられ、その鍵を開けない限り出ることができない。

魔法具の指輪は没収されているので、脱出を試みることもさえできなかった。

ノエルは胸元の石を見下ろした。

今手元にある道具といえば、この魔石だけだ。

しかし、これをダルトン博士からもらってかなりの時間が経った今でも、この魔石の力は未だ不明だ。

今もただ空虚な青を湛えている。

(何とかしてここを出ないと……)

しかし、非力な少女に成す術などない。

エルフォードに連行された際、ノエルとカムイは投獄されたが、エディは別の場所に連れて行かれた。

今彼がどこにいて何をされているのかは全く不明である。一刻も早くカムイと共に牢獄を脱出し、エディを見付け出さなければ。

ノエルは両手で鉄格子を揺すったが、無情な鉄の番人はびくともしない。

ここは名立たる罪人たちを閉じ込めて来た絶対の砦なのだから、人間の腕力でどうにかできる造りになっているはずがない。

（どうすればいいの？）

ノエルは眼を固く閉じ、うずくまって耳を塞いだ。

ここにある光といえば、通路に付けてある足元を照らす程度の灯りだけだ。牢の中にはまるで灯りは差し込まない。

それだけでも不安なのに、他の牢に閉じ込められている囚人の叫びが絶え間なく聴こえてくる。

気が狂いそうだった。

ここに入られてからどれくらいの間時間が経ったのだろう。まるで変化がないこの場所では、外界を知ることなどできない。

もう何日もここに閉じ込められている気がする。

陽光がこれほど恋しくなったことは産まれて初めてだ。爽やかな風も、踏みしめる土の感触も、ここにはない。

あるのは冷たい石の床と孤独だけだ。

悪夢のように響き渡る怨嗟の叫びと暗黒の闇が容赦なく少女を打ちのめす。

（もう嫌……助けて……）

エディ、と呼ぼうとしたが、やめた。

ノエルを狙った矢を受けて倒れた、あの姿。

彼が身を挺して守ってくれたから、自分は無傷で済んだ。

（私はいつも守られてきた……）

今ここで彼を呼んだら、またエディに頼ってしまう。

もしかすると、自分より酷い目に合わされているかもしれない。
あの傷は決して浅いものではなかったのに。

（私は自分で何とかしようとしなかった。何もできない自分の無力に嘆いているだけだったんだ）

ノエルは溢れ出て来る涙を拭った。

エディだったら、諦めはしない。絶望的な状況でも、決して。

泣いている場合ではない。

泣いている暇があったら、少しでも可能性を探るのだ。

（今度は私がエディを助ける番だわ）

ノエルは立ち上がった。耳を塞ぐこともしない。

（何かあるはず……何か……）

その時、足音が響いて来た。

看守だろうか、と思ったが、違う。

やけにその足音は軽く、走っているようにも聞こえる。

足音はノエルの牢の前で止まった。

「あなたが、ノエル・ブライト……？」

ノエルは息を呑んだ。

足音の主は、看守とは似ても似つかない、ノエルと変わらない年頃の少女だった。

第七章 走り続ける者たち（1）

茶色の巻き毛を二つに結び、同じく大きい赤茶の瞳が可愛い少女だった。

「あなたは……？」

ノエルは自分の名を呼んだ少女に尋ねた。

見覚えのない顔——確かにそのはずなのに、なぜか懐かしい感じがする。

少女の大きな双眸は真っ直ぐにノエルを見つめている。

「私はエイミー。あなたを助けに来ました」

「えっ……」

少女——エイミーの右手には鍵の束が、左手には長剣があった。剣はカムイのものだ。

「大丈夫。見張りは眠らせてあります」

そう言ってエイミーは牢の鍵穴に鍵を差し込んだ。どの鍵がノエルの牢を開けるものなのかはわからないらしく、何本もの鍵を次々と鍵穴に入れている。

状況が掴めないノエルは困惑した。

「あの、どういこと？ あなたは一体……」

エイミーは手を休めずに言った。

「今は詳しいことを話している時間はありません。とにかく、エディを連れて逃げて！」

「！ エディを知っているの？」

では、この少女はウロボロスの関係者か——。

しかしノエルは口には出さなかった。

「エディは宮殿のどこかにいます。場所はわからないけれど……シ

モンと一緒にいるはずだわ」

「シモン？」

エイミーはその問いには答えなかった。

その時、がちやりと音を立てて鍵が開いた。

「開いたわ！ ノエルさん、早く出てください」

エイミーが扉を開く。

「待って、エイミーさん。私の仲間がもう一人ここに捕まっているの。彼も……」

エイミーは頷いた。

「もちろんよ。彼は地下の牢にいるわ。早く行きましょう！」

エイミーとノエルは暗い通路を走り出した。

牢は入り組んだ造りになっていて、何も知らない人間が入り込めばすぐに迷ってしまう迷宮のようだった。

しかし先を走るエイミーは一度も迷った素振りを見せず、ノエルが置いて行かれそうになるほどの速度で走り続ける。

（この人……一体誰なんだろう）

先程感じたどこか懐かしい感覚。

一度も会ったことはないはずなのに、なぜだろう。

「着いたわ。ここよ」

しばらく走り続けた後辿り着いた牢の前で、エイミーたちは立ち止まった。

カムイも個別の牢に閉じ込められていたようだ。

「カムイ！」

牢の中で体を横たえていたカムイは跳ね起きた。

「ノエル！ 抜け出せたのか！」

「ええ。この……エイミーさんが助けてくれたの」

「おお！ 助かったぜ。あんた、この城の人？ 看守ってわけじゃ

なさそうだし……」

エイミーは一步前に出て、先程のように鍵を開け始めた。

「ごめんなさい。今は話している時間はないの」

今度はすぐに鍵が合った。

出て来たカムイはエイミーの持つ剣を受け取った。

「ノエルさん。――これを」

エイミーが差し出したのは、ノエルの指輪だった。

「私の指輪……！　ありがとう、エイミーさん」

奪われた時は取り戻せなくても仕方がないとも思っていたのだ。しかし、これは大切な母の形見だ。

涙が出るほど嬉しかった。

「で、エディがどこにいるかはわかるのかい？」

カムイが尋ねると、エイミーは首を振った。

「わかりません。でも、宮殿のどこかにいることは確かです」

「って言うてもなあ……宮殿全体を探すのは不可能だぜ。そもそも入ることさえ不可能に近いのによ。衛兵に見つかったらまたここに逆戻りだ」

「大丈夫です。宮殿までは、私が送り届けます」

エイミーは左手にはめていた手袋を取った。

ノエルとカムイは息を呑んだ。

彼女の左手は、普通のものとは明らかに違った。

まるで一種の芸術品のように、透き通った青色をしている。わずかな灯りの中でもはつきりとわかるほど美しく明るい輝きを帯びたそれに、ノエルは思わず見惚れてしまった。

まるで人の手の形をした水晶だ。

「こ、これは……」

「私の左手には、空間転移の魔石が埋め込まれています」

「！」

カムイはじつとエイミーの左手を見つめている。

「その力で俺たちを送り届けてくれるってのか？」

エイミーは頷く。

「やめとけ」

カムイは真剣な口調で言った。

「その様子だと、大分魔石に侵食されてる。使わない方がいい」
「これ以外に方法はありません。——どうか、許してください。私にできることは、これしかないのです」

「……………」

ノエルは思わず眼帯が付けられているカムイの右眼を見た。
彼の右眼も、魔石なのだ。

一回も見たことはないが、カムイの右眼もエイミーの左手と同じようになっているのだろうか——。

それに、侵食されているとはどういうことなのだろう。

「ノエルさん」

エイミーに呼ばれて、ノエルははっと我に返った。

彼女の瞳がどこか悲しげに、ノエルの胸の魔石を見ている。

「その魔石……どうか、大切に持っていてください」

「！ あなたは、これがどのようなものなのか知っているの？」

エイミーは答えない。

右手で魔石と化した左手を包み込むように握った。

エイミーの左手が、光を放ち始める。

「私はこれくらいのことしかできません。——お願いします。エデイを助けて、この城を早く出て」

「ああ、もちろんだ」

淡い青色の光がノエルとカムイを包み込む。

「ウロボロスを——シモンを止めることができるのは、あなたたちだけの」

視界が光に覆い尽くされる寸前、ノエルはエイミーの眼に光るものを見た気がした。

第七章 走り続ける者たち（2）

エルフォード城、本宮の一室にエディはいた。

広い部屋の中、椅子が一つだけ置かれており、その椅子に少年が座っている。

ただ座っているだけのように見えるが、それにしても様子がおかしい。

両手を後ろ手に縛られ、両足も椅子の脚に括り付けられている。頭は力なくうなだれ、金色の瞳には生気がない。

その時部屋の扉が開き、シモンが入って来た。

「……薬はよく効いているようだな」

悠然とエディに歩み寄り、赤い頭を乱暴に掴んで上に向かせる。

「うっ……」

小さく呻いたものの、エディの双眸は虚ろで、目の前にいるシモンの顔さえ映していない。

「マーリンの居場所を聞かせてもらおうか」

「……いい、やだ……」

消え入りそうな声でエディは言った。

「ほう、まだ意識があるか」

「……ノエルと……カムイ……は……」

シモンの眼がすうっと細まった。

「この状況で他人の身を心配するとはな。殊勝なものだ」

シモンの声は氷の刃そのものだ。

「お前がマーリンの居場所を言わなければ、その大切な仲間が傷つくことになる。仲間を守りたければ、早く言うことだ」

「……………」

「そもそも、なぜ庇う？ お前を置いて、自分だけ逃げた薄情な親を」

エディの黄金の瞳の焦点が、シモンに定まった。

「違う……何か、理由があったはずだ……」

「ふん。そんなもの、本当にあるとでも思っているのか。――お前は知っていたか？ マーリンがエリクシルの宿主であることを」

その時、虚ろだったエディの眼がはつきりと見開かれた。驚愕の色が黄金の双眸を染めている。

「やはり、知らなかったようだ。マーリンはエリクシルが我々に奪われることを恐れ、逃げ出したのだ。お前よりも、エリクシルを選んだということだ」

「……………」

「それでも庇う気になれるか？」

シモンはエディの頭から手を離す。

エディはうつむいた。その肩がかすかに震えているように見える。その上に氷の声が降り注ぐ。

「哀れだな。信じていた者に裏切られるとは」

「……それ以上、言うな」

「何？」

エディは顔を上げ、頭上のシモンを睨んだ。

「お前にあいつとおれの何がわかる！ 知ったような口をきくな！ 獣の咆哮のようだった。」

ほんの一瞬シモンがたじろいだ時、エディを拘束していた縄が焼け落ちた。

「！」

立ち上がるとほぼ同時に、エディの拳がシモンの顔面に向かって飛ぶ。

しかし、その拳がシモンに触れることはなかった。

顔に当たる直前で、見えない何かに阻まれたのだ。

「これほど早く動けるようになるとは、予想外だったな」

特に驚いた様子もなく、エディの攻撃を結界で守ったシモンは平然と言った。

エディは床を蹴って大きく後方へ飛び退く。

その額には汗が浮かび、肩が大きく上下している。

「やはりお前でも、完全には回復しきれないか。あまり動かない方が身の為だ」

「う……るせえ……」

強い口調でエディは言ったが、がくりとその場に膝を付いてしまった。

矢で射られた肩の傷も激しく痛んでいるようだ。

「所詮、お前は籠の中の鳥だ。我々の手から逃げられはしない」
鈍色の瞳がエディを見下ろす。

「マーリンの居場所さえ話せば、それで全て終わりだ。お前もこれ以上苦しみたくないだろう」

「よく……言うぜ」

エディの口元には笑みが浮かんでいた。

「お前らは、おれたちを利用することしか考えてない……使っただけ使われて、ぼろきれみたいになってから捨てられるのはごめんだ」

「ふん……では、ウロボロス以外にお前の居場所があるか？」

「……………」

「マーリンも言っていたはずだ。お前たちのような異端者は、忌み嫌われる存在だと。その力を持ちながら、光の下で生きていけるのか？」

エディを追って来た騎士たちの眼――。

この世ならぬものを見るような視線。

ノエルをさらった一味にエディが力を使った時も、そうだった。

「傷付きたくなければ、こちらへ戻って来ることだ」

「……違う」

エディは顔を上げた。

瞳の奥には炎が燃えている。

「確かに、ウロボロスにいた時はそう思っていた。おれを受け入れるものは外の世界にはないと、ずっと思っていた」

エディは立ち上がり、真っ直ぐにシモンを見据える。

「でも、今は違う。おれを仲間だと——必要な存在だと認めてくれる奴らがいる」

シモンは嘲笑した。

「やはり親が親なら、子も子だな。マーリンも、愛だの絆だの、くだらんものが好きだった。——つまらん感情を知ったものだ。その仲間がお前を裏切らないと保証できるか？ 友情などお前には必要ない。そのようなものは捨ててしまえ」

「……お前には仲間はいないのか？ レオンやディアナは？」

エディの問いに、シモンは氷の笑みを浮かべた。

「私に共感し、協力する優秀な手駒だ。役に立つか、立たないか。それだけだ。彼らもそれを知っている。彼らは私という存在に居場所を求め、私も彼らに望むものを与えてきた。——お前の言うような友情などというものは必要ない」

「……哀れだな」

エディは先程シモンが言った言葉を繰り返した。

「何だと？」

「お前は他人を信じようとしなから、仲間の大切さを知らないんだ。自分の心を閉ざしているから、他人の心も見えないんだ。裏切られるのが怖いのは、お前の方だろう」

その時、シモンの顔が歪んだ。

戸惑いとも怒りともとれぬ感情の色が、シモンの表情を染めている。

「馬鹿なことをほざくな」

はつきりと怒りが滲んだ声だった。

「やはり最初にお前をマーリンから奪っておくべきだった。余計なことなど考えぬよう、最初から『教育』しておくべきだったのだ」
エディは不敵に笑った。

「まっぴらごめんだ。人形に育てられるくらいなら、死んだ方がましだ」

「調子に乗るな、エドワード・クライス。自分の立場を忘れているようだな。貴様は私の牢の中にいるのだ」

シモンがそう言った時だった。

部屋の扉が、凄まじい音を立てて開かれた。

「何——！」

シモンが驚愕の声を上げる。

誰も入って来ることができないよう、この部屋には結界をかけてあったのに。

それを破った侵入者が現れたのだ。

「！」

エディも驚愕を隠せなかった。

開かれた扉の前に、青い外套をまとった銀髪の青年が立っている。

「ランスロット……！」

第七章 走り続ける者たち（3）

「……どのようなおつもりですか、ランスロット様」

シモンは突然現れた騎士に鋭い視線を投げかけた。滅多に感情を露わにすることのないこの男の双眸に、はつきりとした怒りと苛立ちが浮かんでいる。

ランスロットの右手には、青い魔石が神秘的に輝く剣が握られている。

その剣の切っ先が、ゆっくりとシモンに向けられた。

「このような真似……許されるとでも？」

冷ややかなシモンの声にも、ランスロットは動じなかった。

「己の信念に従ったまでだ」

「犯罪者を助けることが、あなたの信念だと？」

「貴様に彼を犯罪者呼ばわりする資格はないはずだ。——ウロボロスの首領である貴様が、彼を囲っていたのだろう」

シモンの眉がぴくりと動いた。

「甘い言葉で陛下を誑かし、絶大な権力を手に入れた。貴様に反感を持つている者は多いが、誰一人として対抗できる者はいない」

「……………」

「私も貴様の操り人形だったが——もう、終わりだ」

「私を殺すと言うのですか？」

ランスロットは床を蹴った。

一瞬で間合いを詰め、シモンに斬りかかる。

ランスロットは最年少で『桂冠の騎士』となった実力の持ち主だ。おまけに、シモンの結界を破るほどの魔法剣を持っている。

銀髪の騎士の動きはあまりに速く、エディでさえその動きを眼で

追うのがやっとだった。

魔法を使う暇などない。

シモンは次の瞬間には、ランスロットの剣に斬り伏せられているはずだった。

「全く、物騒な騎士さんだぜ」

エディのものでもランスロットのものでも、もちろんシモンのものでもない声が響いた。

「！」

ランスロットの剣は、シモンに当たることはなかった。

二人の間に突如として現れたレオンが、それを受け止めていたのだ。

「一体どこから——」

シモンに斬りかかるまでのほんの一瞬のうちに、レオンはその場に現れていた。

到底信じられない。

しかし、実際にレオンはそこにいる。

レオンはランスロットの一撃を己の剣で受け止めながら、楽しげに笑った。

「全く、シモンが呼んだから来てみりゃ、こんなことになってるなんてな。従順な騎士さんが裏切り行為をするなんて、何があったんだい？」

ランスロットの秀麗な顔には驚愕が張り付いていた。

どんなに力を籠めてもびくもしない。

目の前にいる金髪の青年は、いとも容易くランスロットの剣を受け止めている。

「おっと、俺を倒そうなんて思わねえ方がいいぜ。普通の体じゃあ、俺には勝てねえよ」

「どういう意味だ……！！」

レオンは対して力を入れている様子もない。顔には笑みさえ浮かべている。

ランスロットは寒気を覚えた。

今まで様々な強者たちと刃を交えて来たが、このような得体の知れない恐怖を味わったことはなかった。

この世ならぬものと対峙しているような、言い知れない恐怖。

「ランスロット！ 伏せて眼を閉じろ！」

エディが鋭く叫んだ。

この状況で伏せたりしたら、間違いなく斬られる。

しかしランスロットの体はほとんど無意識に動いていた。

レオンがエディの声に気を取られた刹那、彼の剣を弾き、その場に伏せる。

眼を閉じるまでの一瞬、ランスロットは見た。

光が集結するように、エディの体全体が輝いているのを。

「ちっ！」

レオンがエディに斬りかかろうとする。

しかしその刃が届くより先に、部屋中に眼が潰されそうなほど強い光が満ちた。

「エドワード、貴様……！」

シモンの呻くような声が聴こえた。

床に伏せたランスロットのすぐ上を、凄まじい熱が通り過ぎていく。

何が起きているのか全くわからない。しかし、身を起せば間違いないこの光に焼かれるだろう。

感じた事もないような暑さに耐えながら、ランスロットはただひたすら床に張り付いていた。

轟音と共に部屋の窓が残らず砕け散り、高熱を伴う強い光が外界へ飛び出す。

しばらくの間光が空間を支配した後、やがてそれは段々と弱まっていた。

ランスロットはゆっくりと眼を開け、体を起こす。

「……！」

壮絶な光景が広がっていた。

床を除く全て――壁も天井も何もかもが黒く焼け焦げ、部屋にあった椅子やテーブルも、跡形もなく焦げ落ちている。

少年が放った光に焼かれたのだ。

ランスロットが全くの無傷だったのが、とても信じられない。

凄惨な景色の中に、赤い髪の少年がただ一人佇んでいる。

レオンとシモンの姿はどこにもなかった。

「エドワード……」

エディはがくりと膝を付いた。激しく呼吸を乱している。

今の魔法で、エディの体力は限界に達していた。もはや立ち上がる気力もない。

ランスロットはエディのもとへ駆け寄った。

「しっかりしろ。深く呼吸をするんだ」

ランスロットも激しく汗をかいていたが、エディはそれ以上だった。

今にも気を失って倒れそうな様子である。

「は……やく……」

喉から声を絞り出すようにエディは言った。

「ノエルと……カムイに会って……早く、ここを……」

「安心しろ。私が責任を持って君たちをここから逃がす」

エディは朦朧とした意識の中で、ランスロットを見上げた。

「な……んで……お前は、おれを捕まえたいんじゃない……なかったのか……」

「真実を知った今――私には君たちを助ける義務がある。これ以上あの男の思惑に従うわけにはいかない」

その時、ほんの少しエディは笑みを浮かべた。

床に倒れようとしたエディの体を、ランスロットが受け止める。

完全に気を失ってしまったようだ。

ランスロットは少年の体を担ぎ上げ、立ち上がった。思ったよりもその体は軽かった。

これだけのことをやらかしたのだ。すぐに人が集まってくる。

エディは敵であったはずのランスロットごと焼き尽くすことも可能だった。

しかし、それをしなかったのは、あの短い時間でランスロットを信じたからだ。何度もエディに剣を向け、毒矢を射かけたランスロットを。

自分を信じてくれたこの少年のためにも、彼らをむざむざ牢獄に戻すような真似はできない。

ランスロットは少年を担いで部屋を出た。

第七章 走り続ける者たち（4）

突如として轟音が響き、本宮付近の中庭にいたノエルとカムイははっと顔を上げた。

「おい、ノエル！ あれを見ろ！」

本宮を見上げているカムイが言った。

見ると、白亜の壁の一部が黒く焼け焦げている。炎に焼き焦がされた跡のようだ。

今の轟音は、あそこで何かがあったということなのだろうか。

「もしかして……エディィ!？」

「かもしれない。急ぐぞ！」

二人が駆け出そうとしたその時――。

二人の目の前に、突然人が現れた。例によって、いきなりその場に出現したのだ。

若い男の二人組だった。

「なっ！」

カムイとノエルはさっと身構えたが、男たちは二人の存在を特に気に留めている様子もない。いや、気付いてもいないのだろうか。

「あいつ、無茶すんなあ。結構危なかったぜ」

現れた二人組の一人が呆れたように言った。金髪に濃緑の瞳の若い青年である。

もう一人は金髪よりも年上のように、長い黒髪をした美青年だった。

その黒髪の青年が、カムイとノエルに眼を留めた。

「お前たちは……エドワードの連れか」

氷のような声で黒髪の青年――シモンが言う。

しかし、ノエルの瞳は金髪の青年を捉えて離さなかった。

あの夜――血塗れの剣を持って、ダルトン博士の亡骸の前に立っていた男。

真っ直ぐにノエルを見つめる、濃緑の瞳。

「あ、あなたは……」

ダルトン博士を殺した、あの男に間違いなかった。

金髪の青年――レオンはまじまじとノエルを見た。

「ああ、あんた……ダルトンの助手か」

その時、ノエルと同じく、カムイの表情にもまた驚愕が張り付いていた。

「レオン――！」

名前を呼ばれたレオンがノエルの隣のカムイを見る。

濃緑の双眸が真ん丸に見開かれた。

「お前――まさか、カムイか？」

ノエルはさっとカムイを見た。

まさか、ダルトン博士を殺した犯人とカムイが知り合い――？

カムイの見開かれた灰色の瞳も、レオンを見ていた。

「生きていたのか……」

「カムイ？ どういうことなの？」

カムイはノエルの問いには答えない。

「この男……お前が剣奴けんどをしていた頃の仲間か」

シモンが言った。

「ああ……まさか、また会うことになるなんてな」

「……………」

理解力を遥かに超えた出来事が次々と起こり、ノエルの頭の中は混乱に陥っていた。

レオンというダルトン博士を殺した男とカムイが過去の知り合いで、しかも剣奴――闘技奴隷をしていたとは、一体どういうことなのだろう。

ただ茫然とその場に立ち尽くしかなかった。

レオンは不敵な笑みを浮かべた。

「嬉しいぜ。お前とまた会えるなんてよ。俺が助けた命、しっかりと役立ててるみてえじゃねえか」

「……………」

「丁度いい。十数年振りに戦ってみようぜ。ま、昔と同じように俺が勝つだろうけどな」

そう言ってレオンは腰の剣を抜いた。

「全く、今日はついてるぜ。手応えのある相手と二回も戦えるなんて、こんな嬉しいことはねえや」

「レオン」

たしなめるかのような口調でシモンが言った。

「ほどほどにしておけ」

「わかってるよ。悪いけど、先に行ってくれ。俺はこいつを片付けたらエディの方に行く」

「さっさと終わらせろ」

三人に背を向けたかと思うと、シモンの姿はその場から消失していた。

レオンとカムイは微動だにせず、向かい合っている。

「どうした？ さっさと剣を抜けよ」

しかし、カムイは動かない。

「どうしても……あんたと戦わなくちゃいけないのか」

今まで、これほど真剣な表情のカムイを見たことがあっただろうか。その真摯な表情の中には、ある種の寂しさも伺えるような気がした。

「今更何を言ってるんだ？ 俺たちは子供の頃から戦ってきたじゃねえか。その時と何ら変わりやしねえさ」

カムイはゆっくりと腰の剣に手を掛けた。

「まさか、あんたがウロボロスに入ってるなんて、思いもしなかった。また戦う時が来ることも」

レオンは肩をすくめた。

「ま、運命ってやつさ」

「一つだけ、頼みがある」

「何だ？」

「ノエルだけは逃がしてやってくれ」

レオンは楽しげな笑みを浮かべている。

「いいぜ。俺の狙いはお前だけだ——って言うと、シモンに怒られそうだけだな。ほら嬢ちゃん、早く逃げろよ」

ノエルはその場から動くことができなかった。

「カムイ……！」

レオンはダルトン博士を殺した男なのだ。あの恐ろしさがはつきりと脳裏に蘇ってくる。

そんな男とカムイを二人きりにすることなどできない。

しかしカムイは、笑みさえ浮かべて言った。

「言ってくれ、ノエル。先に行ってエディを見付けろんだ。俺のことなら心配すんな。必ず後から行く」

「でも！」

「ノエル、頼む」

ノエルはそれ以上言うことができなかった。

「……絶対によ！」

「ああ」

ノエルは本宮へ向かって走った。

その場に残されたカムイとレオンは、動かずに睨み合っている。

「変わったな、レオン」

「そうか？」

「昔のあんたは……こんなに毒々しい空気を持っていなかった」

レオンは顔をしかめる。

「そんなに毒々しいか？」

「普通の人間とは比べ物にならないくらいにな。——何を……した？」
レオンの口角が吊り上り、笑みの形を作る。

その何とも言えない笑みに、得体の知れない恐怖を感じた。

レオンがまとう空気。カムイは毒々しいと表現したが、まさにその通りだった。

この笑みも、絶対に常人では有り得ない、どこか狂気じみた危険さをはらんでいる。

「変わったのは、俺だけじゃねえよ。お前のその右眼、一体どうした？」

カムイは右眼の眼帯に手を掛けた。

「あんたが相手じゃ、俺自身の力では不利だ」

そして、ゆっくりと眼帯を取る。

「絶対に死ぬわけにはいかない。――あいつの親からもらった右眼、使わせてもらうぜ」

第七章 走り続ける者たち(5)

「君の右眼、勝手だけど新しいものにしたよ」

右眼に大きな傷を受け、死の淵から蘇ったカムイに、マーリンはそう言った。

最初は何の冗談かと思った。

しかし、鏡で己の顔を見ると、その事実を認めざるを得なかった。どうやったのか尋ねたが、マーリンははっきりとは答えなかった。本人がそう言ったわけではないが、この人物は本物の魔法使いだ――カムイは本気でそう思った。

「その右眼は、今まで以上に良く見えるようになってる。どんなに遠くのものも見分けられるし、どんなに早い動きも見切れるだろう。だけど、注意して欲しい。魔石は魔力の塊だから、本来は人間の体に入れてはいけないものなんだ。使いすぎると、君の体は魔力に侵されてしまう」

魔力に侵され続けるとどうなるのかと訊くと、

「死ぬ」

マーリンは淡々とそう答えた。

だったら何の意味もないじゃないかと反論すると、マーリンは微笑した。

その笑顔は、満月のように静謐で、しかし眼を逸らすことのできないほど美しかったのを覚えている。

「体が回復できる範囲なら大丈夫だよ。あまり無理しなければね」それから数週間、カムイはマーリンに世話になった。

金色の瞳を持つ息子の話も、その時に聞いたのだ。

体が完全に回復し、新たな右眼も馴染んだ頃、カムイは再び流浪

の旅に出る事にした。

カムイが村を出る朝、しばらくの間共に暮らしたマーリンは彼を見送った。

「氣を付けて。息子がもう一人できたみたいで楽しかったよ」

そしてもう一つ、

「エディに会ったらよろしく」

カムイは苦笑した。

この広い世界で、マーリンの息子と会う確率など皆無に等しい。しかしマーリンは笑って言った。

「何となく、君とエディはどこかで出会うような気がするんだ。あの子は生意気だけど、カムイとなら上手くやれるよ」

レオンは眼を見張った。

カムイの右眼——それは、普通では有り得ないものだった。

普通なら白いはずの部分が黒く、瞳は鮮血のような赤だ。その瞳中心には、猫のように細長い瞳孔が伸びている。

「……魔石か」

レオンはにやりと笑った。

「それをやったのはマーリンか。あいつ、妙なところでいつも俺達に絡んできやがる」

カムイは剣を抜き放った。

「喋ってる暇はねえ。——行くぞ！」

カムイは地面を蹴った。

二つの剣と闘気が激しくぶつかり合う。

カムイの剣を受け止めた瞬間、レオンは未だかつて味わった事のないほど、強い衝撃を手に感じた。

物理的な衝撃もそうだが、何よりも、少年時代に戦っていたこの相手が、これほどまでに成長したのかという驚きも大きかった。

カムイの剣は恐ろしく速かった。おまけに、レオンの攻撃は全て見切ってかわされる。

カムイの右眼はレオンを捉えて離さなかった。

レオンが動いても、まるで糸か何かで繋がれているかのように、右眼は反応して、勝手にレオンの動きを追跡する。

禍々しいほどの殺気に溢れるその眼に、レオンでさえ戦慄を覚えた。

（ここまで使いこなすとは、驚いたぜ——マーリンの奴、とんでもないのを作りやがったな）

レオンの心は高ぶっていた。

全身が震える。歓喜に沸き立っている。

魔石の眼を使いこなす、かつてない強敵との邂逅に。

カムイが攻撃を繰り返す度、その刃がレオンの体をかすめる度、叫び出したいほどの興奮が全身を満たしていく。

次第にレオンを支配していったのは、彼の本能とも言えるある一つの感情だった。

殺したい——己の刃を、全身を、この男の血で染めたい！

レオンが剣を振る。空を裂く、鋭い一撃だった。

しかし——。

一瞬の隙を縫って、カムイがレオン手から剣を叩き落とした。

そして、肩で大きく息をしながら、レオンの喉元に剣の切っ先を突きつける。

「——終わりだ」

レオンには微塵も恐怖を感じている様子はない。

喉に触れる冷たい感触。今まで生きて来た中で、一度も感じたことのない感触だった。

「お前の負けだ」

敗北——まさか、そんなものが自分に訪れようとは。

勝利も敗北も、レオンにはどうでも良いことだった。

ただ己の本能の赴くまま、レオンは剣を振って来た。どれだけの

血を浴びたか、誰の血だったのかなど、覚えていない。

ただ、戦いたい。殺したい。それだけだった。

レオンは突如笑い出した。

「……何がおかしい」

カムイは剣を握る手に力を込めた。

レオンは自分が剣を突きつけられていることに感慨も覚えないうまく——あるいは、そんなことなどとうに忘れているのか——天を仰いで笑っている。

「ははっ……あの時のチビが……随分強くなったもんだ」

レオンは歯をむき出して笑いながら、カムイを見た。

カムイの背筋を冷たいものがなぞった。

「その右眼も、結構いい使い方してんじゃねえか。普通の人間なら、魔石に体を食われてもおかしくねえってのに……まさか、俺が剣を叩き落とされる羽目になるなんて、思いもよらなかったぜ」

「だったら、さっさと観念しやがれ。急に笑い出しやがって、気味が悪い」

「だけどなあ……」

ゆっくりと右手を上げて、カムイの剣を掴んだ。

「！」

レオンの手袋をはめた右手は、しっかりと刀身を掴んでいる。

「いくら魔石の眼を使っても、俺を殺すことはできねえよ」

「何だと——？」

風が吹き、ざわりと草木が音を立てた。

その時、レオンの全身から、今までとは比べ物にならないほど禍々しい気が立ち上るのを、カムイは感じた。

本能的に後ろへ飛び退こうとしたが、レオンの右手はカムイの剣を離さない。信じられないほどの力で刃を握り締めている。

カムイは確かに見た。

目の前にいる男の、濃緑だった双眸が鮮やかな緋色に変わるのを。レオンの瞳が赤く光ったとほぼ同時に、カムイの剣は砕けていた。

「俺は体に悪魔を飼ってる。エリクシルという名の、『赤き悪魔』をな！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4681v/>

エリクシルの魔道士

2011年11月15日03時24分発行